
とらぶる すぴりっつ

城弾

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とらぶる すぴりっつ

【Nコード】

N 6 4 1 8 N

【作者名】

城弾

【あらすじ】

先祖がかけられた呪いのおかげで酒を飲むと身も心も女性化する体質の酒井真澄。

しかも淫乱な傾向が。

そして酔いが覚め男の心に戻るとき、女として暴走した記憶が真澄を赤面させる。

一杯目 呑まれたら女の子？

大昔、日本のある村。

「こらっ。五兵衛。また酒を呑んだねっ」

若い娘がきつい口調で五兵衛と呼ばれた男を叱責する。

年は数えで26とまだ若い五兵衛だが、酒に酔った赤ら顔と千鳥足が実年齢より老けた印象を与えていた。

「呑んださ。それがどうした？ オレの稼ぎでオレが呑む。そのどこが悪い」

確かに五兵衛は畑を耕し、合間に狩もしてきちんと稼いでいる。そして唯一の楽しみが酒だった。ただ仕事が終わったといえど、陽の高いうちから飲むことがあるのが玉に瑕だった。

「アンタは普段真面目なのに酒癖が悪いから言ってるんだっ」

気の強い娘である。名はお静。

「げへへへ。そんなことよりオレの嫁にならねえか？」

下卑た笑いを浮かべると今までの被害者たちに代わって詰め寄るお静の着物を捲し上げた。

その時代である。下着などつけていない。警戒していたのだが、あまりの早業に間に合わなかった。

「~~~~~っっっ」

声にならない悲鳴を上げるお静。「もうお嫁にいけない」と言うところであろうか？

それをよそ目にのん気に歩き去る五兵衛。

その夜。10人目の被害者であるお静も加わり対策会議を練っていた。

「もうガマンできない。役人に突き出してお裁きをしてもらいましょう」

全員が全員「セクハラ」の被害者だ。だが

「そこまでは…」

「五兵衛も酒さえ呑まなきゃ気のいい男なんだし」

「働き者だし」

実際に素面の五兵衛はむしろ村に多大な貢献をしていた。酒癖だけが問題なのだ。

真面目な反動が酔うととてつもなく酒癖が悪い。

「用は酒を止めさせりゃいいけど」

「ちゃんと金を払っているんだから売るのは止められないし」

「あれだけが楽しみだから自分から止めるとは思えないし」

堂々巡りになった。

「よし。仕方ない。あれをやるか」

相談を受けていた年長者の女・お鶴がつぶやく。懐に入れていた紙を取り出すと、その中にしまっていた一本の髪の毛を藁人形に。

「お鶴さん。まさかお百度参り…」

「殺さぬさ。しかし我らの受けた苦痛は身を持って味わってほしいしな。お主らも力を貸せ。怨念の力が要る」

そう言われても殺す覚悟はない。埒が明かないのでお鶴は説明をすることにした。

「殺す代りにな…」

それを聞いた娘たちの表情が変わる。

そして嬉々として呪術に参加した。

翌日。五兵衛は早々に畑仕事を切り上げると、畑で一杯やり始めた。

「ぶはっつ。五臓六腑に染み渡る」

美味そうに飲み干す。そして酔いが回る。その途端にだ。

ボン！ そんな音を立てて五兵衛は煙に包まれた。そしてそれが晴れると着物姿の娘が。

「な…なんだ？ もう酔っ払ったのか？ オレが女に…夢か？」

非現実的な出来事だ。夢か酔いのせいにするのももっともだ。

だから楽しみである酒を中断しない。

しかし酔いが回れば回るほど自分の心が女に染まっていくのがわかる。

「これはいつたいなにとしたことでしょう？」

なんと酔うにつれて着物まで艶やかに変わる。鬚はいわゆる日本髪に。ご丁寧にかんざしまである。

「うまく行ったようじゃの」

隠れて様子を見ていたお鶴たちが現れた。

「お鶴？ これは夢か？」

「夢などではない。呪いじゃ」

「呪い？」

酔いのせいか。それとも非現実的な出来事に思考が追いつけないのか、ただ鸚鵡返しする五兵衛だった娘。

「そうじゃ。戒めのための呪いじゃ。五兵衛。お主は今後酒を呑むと女子おんなになるぞ」

「そ…そんな」

「酒癖は理屈では治らん。だから酒を呑むと女子になる呪いをかけた。女子にならなくなれば酒を止めることじゃな。殺さぬだけありがたいと思え。そしてこの呪いは末代まで続くぞ。それだけ我らの恨みは大きいと思え」

高笑いをする女たち。五兵衛だった娘はぺたりと座り込む。

四半刻（30分）もそうしていたか。

「もし。娘さん。どうなさった？」

通りすがりの侍が心配して五兵衛だった娘に声をかける。

端整ないい男だった。そしてあるうことか五兵衛は頬を赤らめた。そう、心が女になっている。

「お侍様：はい。少々気分が悪くなりました」

消え入りそうな声で訴える。

「それはいかな」

侍は五兵衛を送る。

そして五兵衛は「送られた礼」と一泊を勧める。さらには五兵衛のほづから男と女の関係に。

侍は神妙な面持ちで再び旅に出た。そして五兵衛も酔いがさめてきたら猛烈に後悔した。未だに娘姿だが、心だけは男に戻った。

「お…オレは男なのに男に…恐ろしい。酒を呑むとそんな気持ちになるように…」

しばらくして「二日酔い」も治まった。酒が抜けるにつれて男へと戻って行く。一生を女で生きるかと恐怖した五兵衛は安堵した。

同時に酒を飲んで女になりきったことを恐怖した。

だから五兵衛は死ぬまで二度と酒を口にしなかった。

そのため元々が真面目なのできちんと祝言を挙げて、夫婦仲良く暮らした。

この話はこれで終わるはずだった。

そう。呪いが末代まで続いているなければ…。

一杯目「吞まれたら女の子？」

現代の日本。ある商社。朝のミーティング。課長のとなりに若い男。その前方に取り囲むように男女。

新しく来た社員を紹介しているところだった。

「このたび本郷支社にきました酒井真澄です。よろしく願ひします」

女性のような名前だが立派な男性である。

ただ優しい顔立ちは女顔といえたし、背もそんなには高くない。

「酒井君はまだ25歳と若いが優秀な人材だ。即戦力になるだろう」
課長の説明。

「よし。今日は酒井の歓迎会だ。吉野君。どこか店を押さえてくれ」
サブリーダーにあたる中年男性が女性社員に依頼する。

「もうやつときましたよ。越野さん」

ロングヘアを束ねたOL姿の吉野桜子が笑顔で返す。彼女も25歳なので酒井と同期の可能性が。

「さすが吉野さん。気配り上手」

吉野より二つ上の男性社員。菊水晃一きくみがややおどけて言う。
「当然です。吉野先輩はあたしたちのお手本ですもの」

24歳だが顔に幼さの残る宇良かすみが先輩を持ち上げる。

「そうよね。それにお酒も強いし」

仕事ができるのと酒の強さが関係ないと思うが、かすみと同期の澤野いずみには同列扱いらしい。

「ま。お前とは違うつてわけだ」

「ひどいつすよ。竹葉さん」

31歳の竹葉忠正に菊水が抗議すると笑いが巻き起こった。しかしひとりだけ浮かない表情をしていたのは主役である酒井。

「あら？ お酒は嫌い？」

いきなりフランクに話しかける吉野桜子。

「いえ：ただ生まれてこの方飲んだことがないんですよ」

こちらはさすがに硬さがある酒井。

「へえ。25にもなるのに珍しい」

「本当だな。一度試して体に合わなくてやめたと言うこと？」

「宗教上の理由とか？」

「いや。親の命令で」

これまた25歳の男子とも思えない発言である。

彼の弁によれば父親の言葉に異様な迫力を感じて、命令を守る気になったとのこと。

それにその父親自身が酒での失敗談を教訓として聞かせたこと。

町中の酔っ払いの醜態を彼自身が嫌っていたことが、酒を口にしない理由だった。

「じゃ試してみしようよ。新しい自分を発見できるかもよ」

「はあ……」

自分を歓迎しての宴だけに無下に断れない。人付き合いはほんざいには出来ない。でも本音は出たくなくて浮かない表情だった。

浮かない顔は酒井だけではない。後輩の女子社員たちもだ。

「吉野先輩。あれさえなければ本当に尊敬できるんだけどなあ」

「ザルだもんね」

吉野桜子は有能な社員である。そして性格も穏やかで、かつ美人でスタイルもいい。

しかし、とんでもない大酒飲みである。

休日で朝食を採ろうと冷蔵庫を開けたがワインしかなかったため、それで空腹を紛らわせたと言っ逸話もあるつわものだ。

「まあまあ。下戸なら下戸で楽しみ方はある。さあ。仕事に入るぞ。ああ。吉野君。とりあえず彼に本郷支社のことを色々教えてあげてくれ」

「わかりました。課長」

仕事も終わり居酒屋に。月曜だったのですすがに宴会も入ってなく、8人が楽に入れた。

週の初めだけに掘りごたつの座敷には周りに客がいない。貸しきり状態だ。

「それじゃ酒井君の参加を祝って、かんぱーい」

8人のうち6人がビールのグラス。女子社員もだ。

主役である酒井は烏龍茶。吉野はいきなりコップ酒だ。

宴は進む。よくある話だが本目的がどこかに行ってしまった、もはやただの飲み会である。

課長と越野は仕事の話。竹葉と菊水はギャンブルの話。かすみと

いずみは他愛もない話だった。

そして桜子の甲高い声が響く。片手には空いた竹筒。

「竹酒もついっぱーん」

上機嫌ではあるが頬が染まったりはしていない。顔色だけ見ていると酔っ払っているとは思えない。

ぽかーんとして見ていた酒井である。

「なによ。そんなに見てて」

「いや、女なのに凄い呑むなと思って」

「あなたはぜんぜんなのね。男なのに」

となりが呑まないと言うのは結構白ける。ちよつとカラミが入る。それに対してまともに返事をする酒井。

「ああ。おじいちゃんが言っていた。『酒井家の男子は酒を呑んではいけない』と」

「なに？ それ？」

「呪いなんだそうだ」

酒は呑んでないが、酒の席の雰囲気です「酔った」のか、口調が碎けこんなことまで喋っていた。

「呪い？」

ここで笑われればそれで済みだった。しかし桜子が真面目に問い返したので、酒井もつい伝承を語ってしまった。

「酒癖の悪さで呪われて、酔うと女になる呪い……？」

相変わらず仲間しかいない状況。だから桜子の素っ頓狂な声は全員に聞こえた。

「だから、あくまで言い伝えだから。そんなに吹聴しないで」
素面の酒井は慌てて止めるが遅かった。

「ふーん。面白そうじゃない。ね。だったら試してみない？」

舌なめずりでもしそうな表情の桜子。

「イヤだよ。迷信だとは思うけど。それにオレは酔っ払いが嫌いだし」

この言葉が力チンと来た。見た目は素面に見える桜子だがしつかり酔っていた。

「ふ~~~~~~~~ん……………根性なし」

「なっ!？」

知り合ったその日に言われるような台詞ではない。酒井も力チンと来た。

「だってそうじゃあない。わけもわからない言い伝えに怯えて、人生の楽しみの三分の二を捨ててるなんて根性なしでなかったらなんなのよ」

（吉野先輩の中でお酒の占める比率ってそんなに高かったんだ…）
さすがについていけない後輩女子。

「お…おい。吉野君。飲みたくない人間に無理やり…」

「……………わかったよ……………」

せつかく越野が止めたのに当の酒井が挑発に乗ってしまった。

「呑んでやろうじゃないか。根性なしかどうかよく見てみる」

言うなり彼は余っていた瓶ビールをラッパ呑み。残量としてはコップ一杯分だが、その行為そのものが危険兆候だった。

「げほっ。げほっ」

生まれて初めての飲酒でラッパのみをやらかせばむせもする。しかもビールである。

「おー。いい飲みっぷり。それじゃこれもいって見よー」

竹酒のためにぐい飲みは何故か二つ用意されていた。店員が余計な気を利かせたようだ。

その使われてないほうに注がれた酒をぐいっとなおる。

どうやら咽たのを治める水のつもりで飲んでしまったらしい。

「なーんだ。呑めるじゃない。良かったわねー。これで人生の楽しみが増えたわよ」

バンと背中を叩く。当の酒井は赤い顔をしていた。

「……………ひっく」

べたにしゃっくりをしたかと思うと「爆発」した。

「な、何なの？」

正確に言おう。酒井の下のほうからボンと言う音とともに煙が上がった。

「浦島太郎」の玉手箱を開けるとこんな感じだろうか。

そしてその煙がはれると見たこともない女がそこにいた。

紺色のレディスーツ。薄いピンクのブラウス。無難な配色のスカーフ。

肉体的には誰が見ても巨乳。そして腰にまで達する黒髪。

とろんとした目つきだが切れ長の涼しげな目元。長いまつげ。

口紅を塗ったばかりのような赤い唇。

白い肌だが頬がピンクに染まりなんとも色っぽい。

フェロモンを撒き散らしているような大人の女性だった。

「だ…誰よ。あんた？ 酒井君はどこ？」

「なーに言ってるんですか。あたしですよ。あたし。あたしが酒井真澄です。桜子さん」

そのOL風の美女は酔っ払いそのものの口調で宣告する。

「なんですってえ？」

元々酒に強い桜子だが、さらにこれでは酔いもさめる。

「それじゃあ…呪いの話は本当…」

目の当たりにしては信じないわけにはいかない。

「ほ…本当に酒井なのか？」

目前で変身したのを見た以上、信じるしかないのだがそれでも信じられず越野が尋ねる。

それに対して淫靡な笑みを浮かべる酒井。いや。この姿の時は下の名前で呼ぼう。

「越野さん。さっきは庇ってくれてありがとうございます」

深々と頭を下げる。

「あ…ああ。大したことは…」

「してないよ」と言いかけたが真澄が両腕を自分の首に回してきたので中断した。

「お…おい。酒井。これは？」

戸惑う越野に対して相変わらず妖しい微笑の真澄。

「うふふふ。あたしからの・お・れ・い」

言うなり唇を重ねる真澄。あまりに突拍子もない出来事に無防備だった越野はもろに「唇を奪われる」。

「こ…越野さん。男同士でっ」

かすみが汚らしいものを見るような目つきで言う。

「はっ?! ケータイ。ケータイ。撮らなくちゃ」

いきなり桜子は自分の携帯電話を探し始めた。そして目的のものを見つけると撮影を開始した。

（ああ。もう一つの悪癖。「貴腐人」ぶりまで…）

などと菊水が考えていたのが命取り。

「菊水さんもいい男よね。お近づきの印で」

いつのまにかそばにきていた真澄がその唇を重ねてきた。

「んーっ。んーっ」

据え膳食わぬは…とは言うものの元は男とわかっている。それにキスされてもたまらない。

もともと本当の女としても人前では…

竹葉も虚を突かれて唇を奪われる。

すっかり女の人格なのか女子は完全にスルーの真澄。いよいよ課長相手だ。しかし

「酒井君。まずは呑もうじゃないか。それからだよ。男と女は」

妙にTS娘の扱いの上手い課長であった。

「はい。真澄。飲みまーす」

酔っ払いのハイテンションで乗せられて、潰れるまで飲んでしまった真澄。

「ひでえ目にあった」

「メストラ」の被害に顔をしかめる男性社員三名。

「こいつは女。そういうことにしよう」

「もしくは犬に噛まれたと言うところですね」

自分の中で折り合いをつけるのが大変だった。

「さて。主役がこれじゃお開きにするしかないが…どうするかな？

一応は男だし、君らのうち誰かが泊めてくれると助かるが」

しかし三人は青くなつて首を横に振る。それも無理はない。

「うーん。しかしウチも四人家族…いや。嫁さんのほうの従姉妹を迎えたから五人か。ちよつと無理だな。かといって宇良くんや澤野くんにも頼めないし」

ここで桜子の名前を出さないのはみんなわかつていた。

「わかりました。責任とつてあたしが泊めればいいんですね。まああれだけ呑んだらたつものもたないし。そもそも今は女だし」
なんとか運び出してタクシーで桜子のマンションまで運び込んだ。

「う…うーん」

うめき声で目覚める真澄。

「あら。起きた」

けろつとした表情の桜子はエプロン姿で味噌汁を作つてたりする。
どうやらダメージはゼロらしい。

「吉野さん…オレ…」

飲みすぎてかすれ声。しかしまだ女の声。本人はまだ意識がはっきりしないのかそれに気がついてない。

「初めてのお酒であそこまで弾ける人も珍しいわ」

「そつか…酔いつぶれて…なんだ？ 声が妙に高いな」
やっとそれに気がついた。

「そりや女なんだもん。そんな声でしょ」

「女つて……なんだあ？ こりゃあ？」

半身を起こした真澄は自分のふくよかな胸元に驚愕した。
皺になるからブラウスやスーツなどは脱がされたものの、正体不明になったこともありランジェリーまで手が回らなかった。

正確には自分のネグリジエを着せようと思ったものの、完全に酔いつぶれて重くて着せるどころではなかった。

だからといって素っ裸にも出来ず、寝巻き代わりで下着のままだ。「驚いたわ。本当に女になるなんて。しかも服が変化する上に化粧までちゃんとしてるんですもの」

「の…のろいは本当…あつつつ」

頭を抑える真澄。二日酔いだ。

「はい。お味噌汁。二日酔いにはいいわよ」

「あ…ありがとうございます」

あまりにとんでもないことで対処しきれず現実逃避で「普段の行動」をとってしまったか。

あるいは聞かされていたので覚悟が出来ていたのか。驚くほど普通の行動だった。

「姿は女のままだけど人格は男に戻ったようね」

「なんのことです？」

「憶えてない？」

桜子をはじめに真澄に今の女としての顔を見せた。ちなみにさすがに女性ならではの気配りで、メイクを落としてから布団に寝かされている。

そしてケータイの写真を見せた。そう。男性社員相手にキス魔と化したあの写真。

「あ」

「んふふふ。あー。いいものを見せてもらったわあ。どうせなら男の姿だと完璧だったけどねえ」

からかうための芝居ではなく、本気で喜んでいたようだ。なんとも幸せそうな笑顔を見せる桜子。

「あ…ああ…」

二日酔いとは別の理由で青くなる真澄。布団にもぐりこんでしまふ。

「どうしたの。お味噌汁冷めるわよ」

「もう…絶対に酒は呑まない。女にならない」
それは図らずも二日酔いの後悔で「酒を呑まない」と自分で宣しているのと似ていた。

結局男には戻れず。しかし「二日酔い」を理由に仕事を休むわけには行かないと考えた真澄は無理をして出社する。

「や…やあ。酒井。大丈夫か。寝てた方が」

怯えているがフレンドリーなのは歳の近い菊水だ。

「大丈夫です。昨日はご迷惑をかけたようで、申し訳ありません」
しかし頭が痛むのか苦痛に顔が歪む。

「ホントに大丈夫？ 迎え酒するなら付き合うわよ」

「結構です！！ もう二度と酒を口にしたくありません」

（そりゃあそうだろうなあ）

ほとんどの人間が心情を察する。

「それにしても困ったな。とりあえずは女子姿だが制服がない」

ボケている…と言うよりなんだかなれている課長の対応。

「もしかして…昨日は飲み会だったから会社帰りみたいな格好になったけど、今ここで飲んだらOLになったりして」

桜子は素面である。

「まっさかあ」

もつともな反応のかすみ。

「それに先輩。呑ませるツたってオフィスにお酒なんて」

「目の前は酒屋じゃない」

課長が止める間もなく桜子は飛び出していた。どうも酒が絡むと人格が変わるようだ。

そして一杯の日本酒が。地酒とかではなく、どこにでもある大メーカーの酒である。

助けを求めるように課長に視線を送る真澄。だが

「仕方ない。呑みなさい。どうせ制服がないし、女の姿では落ち着

かないだろう。場合によっては帰っていいから。それなら呑んでも構わない。そうすれば吉野君も気が済むだろう」

興味しんしんで見ている桜子。確かに落ち着かないようだ。

「わかりました」

やけくそで真澄は一口飲む。安物が口に合わなかったか途端に咽る。そして…また煙が。

「あら。やって見るものね」

本当に制服姿になっていた。

「便利なもんだな。变身すると服まで変わるのか。ウチの息子は服のほうに体をあわせるから正反对だな」

どうやら身内にこういう体質の人間がいるらしい。だから落ち着いている課長。

「どう？ 気分は？」

「はい。なんだかお酒を呑んだのに酔いを忘れた感じですわ」

一口だがまた女性人格化したようだ。しかも真面目なOLに。

酒を呑んで何も出来ないどころか、むしろ男のときより集中して仕事をしているようだ。

しかもきびきびした態度が課内を引き締め、いつになく能率が良く仕事がかどる。

「うーん。職場で酒なんてとんでもないと思ったが、例外と言うのはどこにでもあるもんだな」

「ついでに言うとお酒で上手く行ったのなんてのも初めて見た」

サブリーダーの越野が感心したように言う。

それほど見事な仕事振りだった。

しかも変身して女心になっても、仕事に支障を来たすほどの酔い方ではないため間違いもない。

いいほうにいいほうに転がっていく。

もともと本人としては大失敗をしでかせば、二度と酒を強要されずに済んだわけだが

よほどアルコールに弱いらしく、午後になっても女のままの真澄だった。そんなとき

「た…大変だ。みんな。抜き打ちで『ご隠居』がお見えになったぞ」
頭の薄い冴えない中年が飛び込んできた。

「鳥山専務…と、秘書の丸さん」
課長がつぶやく。

「なにを落ち着いているんだね。君は。お得意様のご隠居のへそを曲げたら大変だぞ。宇良くんか澤野君がお相手しなさい」

「えー」

「それはちよつと」

いっぱしのOLである二人がこねる。

実はこの「ご隠居」。せつはら節原相談役はたいそうな「すけべ」なのである。だから相手は女性限定。

そのせいで大得意ではあるものの、女子社員には嫌われていた。

「あたしは前に酔った勢いで殴ったことがあるしなあ」

もちろん桜子の話。ちなみにこのときは「ご隠居」も行き過ぎを認め、不問に処された。

なにしろオフィスと言うのに無理やり酒を飲ませたのである。

もつとも桜子が舌なめずりをしていたのは言うまでもないのだが。

「あの…それならあたしが行きます」

志願する巨乳OL。彼女はセクハラの被害にあってないからこれがいえた。

さらには前夜の醜態の汚名返上の意味も。

「誰だ君は。見たこともない」

鳥山専務が言うのも当然である。なにしろ真澄自身この姿は前日の夜に生まれて初めて。

「まあまあ専務。ここは任せてみましょう」

「し…知らんぞ。私は。責任は君が取るんだぞ」

「お待たせしました」

お茶を持っていく真澄。

「ん？ 初めて見る顔じゃの」

「はい。酒井真澄と申します」

丁寧に挨拶する真澄。さらさらの長い髪が零れ落ちる。

「ほう。美人じゃの」

すけべそのものの瞳の光。

「どうじゃ。となりにこんな」

「はい。では失礼して」

事前に逆らわないように指示されていたので、言われるままに隣に座る。

緊張した表情が老人の心を刺激する。

「うんうん。可愛いのうち」

「は…はい。ありがとうございます」

だいぶ心が女性のそれになっていたが、それでもこんなことを言われたことがないのであしらえるほどうまくはなかった。

それがまた初々しくて節原の『萌え』を刺激する。

厄介者の相手を押し付けた形で後ろめたかったか。

ドアを僅かに開けてかわるがわる様子を伺う同僚たち。

「あのジジイ。相変わらずのセクハラだな」

「気をつける。相談役といっても誰も頭が上がらないんだからな。

暇ではあっても事実上トップに君臨しているようなもんだ。機嫌を損ねる形で契約をご破算にされたら大変だぞ」

だから言われるままに女子社員が相手しているのである。

「越野さん。大変。ご隠居ったら」

いずみの声でみんながみると、なんと老人は紙パックの酒を真澄に差し出していたのだ。

「あ…あの…勤務中ですので…」

かすかに残る前夜の醜態の記憶。

そうでなくても建前じゃなくても勤務中に飲酒などもつてのほか。まあ既にタブーを破ってはいるが…

「なんじゃ。ワシの酒が飲めんと」

不機嫌そうになる。空気が悪くなる。そのときだ。

「飲酒を許可する。これは業務命令だ」

自らの保身に余念のない鳥山専務が乱入していきなり「お墨付き」にしてしまった。

言うだけ言うたとささと立ち去ってしまう。

「ほれ。お前さんとの専務もああいってる。呑め。呑め」

セクシャルハラスメントとアルコールハラスメントを併発している。

「は…はい。それではいただきます」

あちこちから呑むように仕向けられて、やむなく真澄は酒を口にした。

そしてあつという間に酔いが回る。

頬が赤くなり、目つきがとろけたようになりなんと色づぼかった。

さらに老人に絡みつくように豊満な胸元を押し付けてくる。

「お！ おお」

女子をからかっていた節原だったが嬉しい「逆襲」に声を上げる。

「ねーえ。おじいさま。真澄、お願いがあるんだけどなあ」

淫靡な響きの声色にまでなっている。

「おう。なんじゃ。言ってみい」

「ウチの会社に契約してくださらない？」

「そんなことか。つまらん」

いきなり仕事の話ではしらせもするだろう。もっともここはオフイスだが

「そんなこといわないでえ」

真澄は節原の皺だらけの手を自分のむき出しの太ももに触れさせ

る。さらに密着をしていく。

そして胸元のボタンを外してちらちらと谷間を見せる。拳句の果てには開いていた節原の手を谷間に自ら導く。

「おおおおつ。こりゃたまらん。わかった。契約を回すようにしてやるから」

「賄賂」が効いた。

「きゃーっ。ありがとう。おじいちゃん。これはお礼よ」

電光石火の早業で真澄は老人の頬に軽いキスをした。

一部始終を見ていた同僚たち。

「あー。また後悔することになったわね」

「上手くご隠居の相手をしてくれたのは感謝だが」

「物凄く申し訳ない気が…」

「酒井さん。不潔！」

口々に評価をしている中で当の二人は酒盛りを続けていた。

電車の中。真澄はだいぶ酔いが醒めて来た。体より先に意識が男へと戻る。

途端に恥ずかしさで赤くなる。

周りの乗客は〇らしい女がいきなり赤面したから、痴漢かと疑うが、すいていて真澄の背後には誰もいない。

（お…オレは…酔った勢いでなんて恥ずかしいマネを…）

皮肉にも白い頬を朱に染めるその姿が可愛らしくて、無差別に男を興奮させていた。

今度は自宅に戻る。

一刻も早く女物の服を脱ぎたくて歩きながら脱衣。そして別のトランクスを身につけたときふと鏡に目を。

そこに映る姿は紛れもない女の裸身。腰につけているのが男物の

トランクスでシユールな印象。

広いはずの肩幅は狭く華奢なで肩に。

スポーツで焼けたはずの肌は雪のように白く。

引き締まった胸板は大きめの二つの膨らみに。

元々引き締まった腹部だったが、こんな折れそうな細さではなかった。

足には無駄毛がまっただけでなかった。どこからどう見ても女の姿。

「……ねよう」

悪夢から逃れるために彼女は布団に入った。

翌朝。

「ん…んん」

太い声のうめき声。その声でがばつと目が覚める。

「元…戻ったのか？」

酒井はパジャマの前を開く。膨らみはなく、引き締まった胸板に戻っている。

起きぬけでトイレに出向くと歓迎会以来ご無沙汰だった「男のシンボル」が戻っていた。

「よかった…一生あのままかと思った」

安堵のため息。

着替えるためにベッドルームに戻る。そこには脱ぎ散らかされた衣類が。

ただストッキングは紳士用靴下に。ショーツはトランクスに。ブラジャーはランニングシャツ。

ブラウスはワイシャツへとそれぞれ戻っていた。

しかも足の無駄毛どころか、女になっていたにもかかわらず無精ひげがきっちり伸びていた。

「不思議な話だ。だがもう二度と酒は呑まんぞ。そもそもオフィスで飲むなんてのが例外中の例外だ。そんなことはあれっきりだろう」

そう思つのを樂觀視と言つのは酷であらう。

出勤した酒井は自分の耳を疑った。

「いやあ。昨日の謎の女子のおかげか、うちに契約が舞い込んでね」

ほくほく顔の鳥山専務。

「なんでもご隠居はこの仕事を依頼する相手を探していたらしい。あの接待で落ちるんだから拍子抜けだが」

青くなっていた酒井。

「そんなわけで彼女のためと言う特例で飲酒を認めよう」
(なんてこった…業務命令で吞まされる…)

上機嫌の専務が立ち去り残された面々。

「あの…オレ…」

「酒井。諦めてくれ。こういう体質はおもちゃになる運命なんだ」
課長が諭すように言う。小声で会話するかすみといずみ。

「それにしても二村課長は何であんなに冷静に扱えるのかしら？」
「噂じゃ課長の高校生の息子さんが同じような体質らしいわよ」

硬直する酒井の肩をばんと叩いたのは桜子だった。

「吉野さん。オフィスで酒なんて非常識ですよ」

「うん。でも良かったわね。公認でお酒飲めるわよ。しかも経費だし」

「経費」

そのタイミングで来るから恐ろしい。

「ちわー。酒のゲキヤスです。ご注文のビールケースと日本酒一升。ウイスキーですが…ほんとにここでいいんですか？」

贈答用ならまだしも…怪訝な表情の酒屋だった。

「はい。いいですよ。ほらほら酒井君。あなたのなんだから運ぶの手伝って」

ついでに自分が飲むつもりの子が、にこにこ作業をする。

本気で辞表を提出しようかと考える酒井だった。

一杯目 呑まれたら女の子？（後書き）

酒を呑んで調子に乗って色々やって、冷めてから激しく後悔というのと

TS娘が調子に乗って女としていろいろやって、元の姿に戻ってから猛烈に恥ずかしくなって後悔するのが似てるなあと思ったのがきっかけです。

登場人物の名前はほとんどは日本酒の銘柄です。

「吉野」も「桜子」もそうです。

「宇良かすみ」と「澤野いずみ」は姓名合わせてで。

ちなみにサブタイは元の方では熟語でしたが「セーラ」と区別するため新規につけました。

今回もお読みいただきまして、ありがとうございます。

城弾

二杯目 呑まれたら外国人？

月曜日に新しい勤務地である本郷支社へと向かい、その夜の歓迎会で勢いから禁じられた酒を呑んでしまい。酔うと女性へと変身することが判明。

しかも心までが女に、それもちらかと言うと色ボケ気味に。さらには好色の「お得意様」に気に入られて、専門の接待要員に。つまり仕事で酒を呑み、女にならざるをえない。

まさに人生観の変わりかねない一週間の激務を終えての土曜日。酒井真澄は都内の実家へと舞い戻っていた。

体質：呪いについての詳しい話を聞くために。

「父さん。何であの『酔うと女になる』体質を教えてくださいなかつたんだ？」

居間に上がるとスーツ姿のままいきなり怒鳴る。

「なんだ？ なっちまったのか？ 女に」

「うっ」

つまりそれは禁を破ったことを意味する。口ごもるのも無理はない。

「オレは禁じたはずだぞ。呑むなつて。それさえ守ってりや女にならずにすんだはずだ」

酒井をそのまま老けさせたような初老の男が面倒くさそうに言う。休日の自宅と言うことでラフな格好だ。しかも寝転んだままだ。

「それにしたつてあんなことわかっていたなら」

憤慨している酒井は収まらない。しかし老齡の男性はまるで意に介してない。

「今更そんなこと言いに来たのか？ そんなことよりチャンネル変えてくれ。10番だ」

「……父さんの方がリモコンに近いじゃないか」

この父親。酒井和水は横着な人物であつた。

真面目に話を聞かない父相手に、かなり険悪になりかけたところを救つたのはやはり女性である母。

「はいはい。真澄。座りなさい。まずはご飯食べましょ。ハイ。これでも呑んで落ち着いて」

母親が透明な液体の入ったグラスを父と子に渡す。

熱くなっていた二人は何も考えずに受け取り、そしてにらみ合つたまま呑んでしまい

「ぐえほげほげほ」

激しく咽た。

「か：母さん。これ」「酒じゃないのか？」

親子揃つて打ち震える。

「まずは実際にご対面。楽しみだわあ。真澄がどんな女の子か。父さんのも久しぶり」

ボボボンッ

言っているそばから両者の床の辺りから「浦島太郎が玉手箱を開けたとき」を連想させる煙が上がる。

次の瞬間、息子である真澄はスーツ姿のビジネスマンスタイルから、ピンクのセーターとロングスカートの巨乳娘に。

髪の毛は二つの房を後ろにたらずツースイドアップと言うそれに父である和水は和服姿は同じだが留袖姿の熟女に。やはり胸の大きな美女だ。

「男同士でケンカになるならみんな女になればいいのよ。男は人付き合いヘタだけど、女は上手いから」

さらつと言う母親に毒気を抜かれた二人はへたりこむのであつた。

「あらあら。間違はなく血筋だわ。よく似た母娘になったじゃない」
産んだほうの女親ののん気な一言。

「もう。騙すなんてひどいじゃない。ママッたら。あたしお酒は二ガテなのよね」

すっかり甘えた娘になりきった真澄の口調。

「ガマンしなさい。そういう呪いなんだから」

女性化した途端に文字通りに「襟を正す」和水。寝転んだ体勢から瞬時に正座に。

一部の隙もない姿勢になると「妻」を見上げる。

「それより母さん。さっきから匂い嗅いでいると思うんだけど、もう煮物を出すの？」

「ええ。そろそろいいわよ」

「ダメ！ まだ全然煮えが足りないわよ。ああもう。なんだって本物の女なのにあなたはこうずばらなのよ？」

言うなり和水は立ち上がり台所へ。そしててきぱきと仕事をする。

「……信じられないわ……パパッたら、普段は縦の物を横にするのも面倒くさがるのに」

「久しぶりに見たわね。普段はテレビのチャンネル変えるのも人任せなのに、女になると途端に細くなるのよね」

懐かしそうに言う母。悦子。

「あ…あの…ママ？」

関が悪そうに切り出す真澄。いわば娘としては初対面だ。しげしげと顔を見ている悦子。やがて笑顔を見せる。

「初めてね。真澄。あなたのその姿は。可愛いじゃない。お父さんと同じで自動的にお化粧もされるのね」

「うん。実はこの体質で色々尋ねたかったけど…あのパパを見たらなんだかどうでもよくなって…」

なにやらうずうずしている。

「真澄もする？ お料理」

「うん」

女三人で台所仕事だった。

「やっぱり女の子ねえ。それにこうしてしまえばみんな女向けの味

付けでいいし」

実はそういう狙いもあった。したたかな女性である。

そして夕食。既に酔ってしまったせい、か酒に対して抵抗がなくなり、この際だからと潰れるまで呑んで、そして話した。

しかしそれまでほとんど呑んだことがない上に、女になって肝臓が小さくなりアルコール処理の弱くなった真澄はやはり悪酔いして、自分の着ていた服を汚す羽目に。

翌朝。

「うっ…頭が痛い…」

真澄は痛む頭を抑えつつ目を覚ました。

そして自分がネグリエを着せられていることに驚愕した。

スケスケとかはいわないものの、フリルがどう見ても多目だった。

「こ…これ…姉ちゃんのじゃ」

「ええ。さくらのよ」

二つ年上の姉。さくらはいまだ独身。家族と同居。この土日は友達と旅行だった。

「やっぱり姉妹だけによく似てるわね。お化粧を落とすとなおさらだわ」

「うっ…。ネグリエなんて…恥ずかしい」

既に心だけ男に戻っている真澄は恥じ入った。

「なんだ真澄。まだ寝巻き姿では呑んだことないのか？」

男物のパジャマに着替えていた和水が起きるなりさういう。

「酒は出来るだけ呑まないようにしてたんだよ。女になると男では考えられないほどエロくなるし」

「そうだろうな。オレも若いころは何度か朝起きたら隣に男がいたことあったし」

いきなりのカミングアウト。もっとも母親は承知の上らしく驚か

ない。

しかし「実例」を聞かされた真澄はたまらない。

（ほ…本当にそこまで突っ走るんだ…絶対に吞まないようにしないと…）

「さあさあ。朝ごはんにしましょう。真澄。今日もお休みでしょう。夜までいたらさくらも帰ってくるから、久しぶりに家族で食事よ」

「それまでに戻れるかなあ」

「ずきずきとする頭が酔いの深さを物語る。」

「なに言ってるのよ。家族で何を恥ずかしがってるの？」

「母さんがあんなふうになんか飲ませなきゃ」

「だってああでもないときとお互い言いたいことも伝えられなかったわよ」

確かに実際に父親の変身を見て血筋を理解したし、自分の変身で状況を伝えられたようだ。

それを見越した母の作戦と言うなら見事である。

「母さんも結構呑んでいたのに平気なんだね」

「母さんは新潟の酒だよ」

酒どころである。ちなみに前夜父と子に飲ませたのも、安物ではあるが新潟産の酒である。

朝食を採りくつろぐ父と息子…いや。肉体的には母と娘と言うべきか。

洗濯機のまわる音がしている。そんな普通の日曜日。

何の気なしにテレビを見ていたら真澄の携帯がなった。

「はい。もしもし」

『酒井君？　もしかして女の子になっっているの？』

「あ…吉野さん。ハイ。ちよつと実家で呑んじやって…」

電話の相手は真澄の同僚である〇し。吉野桜子。

有能な美人〇しだが、ヤオイ趣味ののんべなのが困った人である。

『それでもいいわ。急な仕事が入ったの。明日代休取れるからこれから来てくれない？ みんないるけど手が足りないのよ』

「え…でも今の俺…」

『ご隠居相手にしているときはいつもその姿でしょ。構わないから早く来て』

相当に切羽詰っているらしい。思わず了承の返事をしてしまった。
「仕方ないな」

真澄はネグリジエを脱ぎ捨てる。ショーツ一枚だけの姿。もちろん胸は何もない。

「母さん。会社に行かないといけなくなっただ」

「あらあら。でも洗濯しているのよ。あなたの服」

そう言えばタベ汚したな…それを思い出した。

「いいよ。何か適当に借りるから」

父親の服を借りようとしたがズボンは極端に尻が大きく不恰好にワイシャツに至っては胸囲が男性のときより下がっているにもかかわらず、極端に前に出ているためやはり形が逢わない。

「真澄。とりあえずさくらの服を借りなさい」

「うう。仕方ないか…」

家系なのか姉も胸が大きい。そのためかまるで真澄本人のもののように女性用スーツがぴったりとフィットする。

「それじゃ後はこれ飲んで」

前夜の記憶が蘇える。一応においを嗅ぐとかすかに酒とわかるにおいが。

「母さん。俺はこれから仕事に行くんだよ？」

言つと真澄は出て行くとする。しかし履いてきた靴がぶかぶかで合わないため、これまた姉の靴まで借りる羽目に。

「ちよつと真澄」

しかし彼女は出て行ってしまった。悦子はおろおろして女姿の和水に視線をよこす。

「放っておけ。一度痛い目を見れば理解できるだろ。そもそも靴が

変化してない時点で気がつかない辺りが間抜けだ」

洗濯をするのだからポケットの中身はすべて出してある。
だから財布も定期も捜すことなくタンスの上においてあった。
もつとも通勤ルートではないので切符を買う羽目になったが。
真澄はもつとも早く会社につけるルートを路線図を見て考えていた。

電車に乗れば乗ったで仕事のことを。だから自分のこれから来る危機に気がついていなかった。

程なくして職場の最寄り駅に着く。
さすがにタクシーを使うほどの距離でもないためここは歩く。
ここでタクシーを使って会社に横付けしていれば、あんな悲喜劇は起こらなかったが

もつ少しで会社と言うところだ。再び煙が舞い上がる。

(え？ 飲んでないのに？)

そう。それは呪いが解除される時の煙だ。つまりすっかり酔いが覚めたのだ。

そこで悲喜劇は起きた。
パンストを借りなかったためスカートから覗く脚の毛がびっしりと。

前がきつかった胸元は横幅がきつくなる。

そして頬をくすぐっていた髪が一気に短く。

その頬をなでると無精ひげが。

要するに：男に戻ってしまったのだ。しかも衣類は女物のまま。
不幸中の幸いは化粧をしなかったこと。この状態ではかなり困った顔になっていただろう。

「わ…わわっ」

人に見られまいと慌てて近くの公園に駆け込む。植え込みに飛び

込んだ。会社までは500メートルなのに…

（な…なんで？ 服も一緒に変わってしまうはずなのに…あ。これは違う。姉ちゃんのだ。起きてから着替えている。この服は飲んだときには着ていない）

つまりは変化していないのだ。だから酒井が元に戻ってもこの服は「もとの女物」のままなのだ。

履いてきた靴が飲んだときには脱いでいたため変化しなかったことに気がつけば、まだ回避できたかもしれないが。

その頃、酒井家では酒井の着ていた服が元のスーツに戻っていた。
「あらあら。あの子ってば。酔いがさめたみたいね」

「どこで戻ったが問題だな。まあ今なら携帯電話もあるから助けを呼べるか。オレの時なんざそんなものないから近くを探してだな

…」

酒井は草むらに隠れていた。

幸い公園といえどそんなに人目がない。何とか隠れていられた。息を潜めていたら携帯がなった。慌てて出ると桜子だった。

『ちよつと酒井君。いつになったら来るの？』

いつまでも来ないから切れ気味に問い合わせ。

「いや…それどころじゃなくて…」

『……男の声ね……』

勘がいい…むしろ妄想慣れしていた。切れていたはずが状況を楽しむように。

『……はっはーん』

それだけで事態を把握したらしい。

「と…とにかく助けを」

『わかったわ。場所はどこ？』

公園に隠れている事を伝えて通話を切る。

「探し物ですか？」

ほっとしていたところに声をかけられて驚愕した。植え込みの中に「先客」がいた。

やはり若い青年だ。細身で中々の好男子だ。

「わたしもメガネを落としてしまつて探しているんですよ。見ませんでした？」

「あ…あの…」

この青年は目が悪いらしいが、自分がその裸眼でどのように見えているのだろう。

女物のピンク色のスーツを着ている青年である自分を。

「ああ。失礼。僕は諸星といいます。お嬢さんも探し物ですか？」

どうやら服の印象で女に思われたらしい。さらに言うなら元々が女顔。

きちんと髭を処理して、化粧をして夜の闇でなら女で通るかもしれない顔。

「えと…その…」

言いよどむ。それはそうだ。

どうやら言いたくないと判断した諸星は話題を変える。

「うーむ。裸眼でメガネを探してもらちがあかないな。仕方ない。

頼んだぞ。ミクラス。ウインダム。アギラ」

連れていた3頭の犬を解き放つ。やがて一頭が派手な赤いメガネを探し当てる。

「ああよかった。壊れていないらしい。それでは……でゅわッ」

メガネを思い切り前方に突き出して顔にあわせるといふ派手な仕事でつけた。

視界がはつきりして見えたのは女装の青年。フリーズした。

「……………」

物凄く居心地の悪い酒井。情けない声を出す。

「ど…どうも」

「はっじめましてえ」

声は上からした。

「吉野さん!？」

上を見ると確かに吉野桜子が。どちらかと言うと「カメコ」が持ち歩いてそうな大きなカメラで酒井を写す。フラッシュフラッシュフラッシュ。肖像権まったく無視。

「わわっ。何するんですか？」

「こんなおいしい場面を撮らないなんて女が廃るわよ。もう。酒井君てば。なんてわたし好みのことをしてくれるのかしら。欲を言えばちゃんとお化粧してカツラもほしかったけど」

「は…早く助けてくださいよ」

泣きそうな懇願。

「仕方ないわね。ほら」

安酒を差し出す。

「うっ。やはりこの手が」

諦めて酒井はぐいっとなおる。酔いが回った途端に煙と共に女姿に。

今度は着用してから飲んだので服も変化。真澄に完全にフィットしていた。

「助けてあげたんだから今日一日私のことは『お姉さま』と呼ぶように」

「はい……お姉様」

犬よりも力関係が厳しかった。

「それではごめんあそばせ」

「ごきげんよう」

笑いながら啞然とする諸星をおいて歩いていく二人。

二人が去ってから彼はぽつんとつぶやく。

「うーん。やはり東京は凄いとこらだ。神戸で羊の世話をして暮らそうか」

オフィスに着くともう一度呑む。これで制服にまで変化。さらに

はOLモードになっていた。

「見慣れたはずだが便利なものだと思うよ」

自身も「服に着られて女になる」息子を持つ二村課長が言う。

「申し訳ありません。早速仕事に入ります」

酔っているのにきりりとする。

確かに肉体的には酔っている。だから女性化している。

しかし泥酔と言うわけではなく、そのため乱れてはいない。

心は女になる。真面目で勤勉なOLに。

以前の時は分量を間違えた上に、居酒屋だったから思い切り碎けていた酔っ払いぶりだったが、オフィスで少量のせいかうまくあっていた。

ただし酔いがさめると仕事人としてはよくても「女装」になる。

だから醒めて来たらまた適量を飲ませないといけない。

中途半端な女装状態では仕事にならない。

もっともいつもなら飲ませたがる桜子が今回はおとなしい。

その「女装」状態になるのを狙っているのはみえみえだった。

三時が過ぎて、どうやら五時くらいには引き上げられそうな目処が立つ。

みんなでお茶だ。真澄も調整と一服でコーヒーだ。

ちなみに普段はブラックだが女性化したらシュガースティック二本と、ミルクをいれて飲んでいた。

着替えがないため女性でいえないとならないが、肉体だけになっていればそれでいい。

だから変身が解けるまでは酒を呑みたくなかった。

「課長。お客様です」

髪の毛を「ひっ詰めた」OL...と言うより少女が来客を告げる。

どうやら同様に休日出勤を余儀なくされたらしい。

「恵里衣くん。ご苦労さん」

同姓がいるため名前で呼ばれていた。

「ところで課長。かすかにアルコールのにおいがします。もし飲酒しての仕事なら、それは業務にさしつかえる確率が85%で…」

「恵里衣くん。お客様と言うのは？」

「そうでした。どうぞ」

機械的に挨拶して来客を通す。

「父さん？ 母さん？」

既に元に戻った父親。和水と共に母・悦子がやってきたのだ。

「皆さん。真澄がお世話になってます」

悦子が深々と挨拶をする。

（この人が…）（酒井さんのお父さんなんだ？）

宇良かすみと澤野いずみはひそひそとナイショ話。

男たちもそれを咎めない。気になるのは同じだからだ。

（この男性も酒井みたいに変身を？）

どうやらその疑問をぶつけられるのは察していたのか、やや引き気味の和水。会釈だけする。

「これはこれはご丁寧に。息子さんは大変よくやってくれています」
課長の言葉は社交辞令ではない。実際に酒井真澄は有能な社員だった。

ただし…彼のために吉野桜子が暴走するのに目を瞑ればの話だが。

「二人とも何しに？」

「バカもん。お前のために着替えを持ってきてやったんだ。ほれ。靴もだ」

それは実家においてきた自身の服一式と靴。

「あ……そうか。それじゃ…課長。ちょっと着替えていいですか？ 姉の服を借りているからこれをもって帰ってもらいたいんで」

「ああ。どうせ休憩中だし…女子更衣室使っていいから」

「お待たせしました」

その姿はアキバ系でないはずの彼らにも『萌え』と言う単語を脳裏によぎらせた。

まだ女性の肉体のため、着ていた男性服がぶかぶかなのだ。

それが逆に女性の肉体の華奢なところを強調していた。

「それじゃ酒井君。ぐいっとあおってみよう」

冷蔵庫から安酒を取り出す桜子。

「いいですよ。もう。ちゃんと男の服が戻ってきたし。このまま元に戻るだけだし」

「でも酒井君。靴が合わないわよね？」

「う……」

酒井自身の靴は26センチ。女性化すると22・5センチ。

「ほらほら。ぐいっとやりなさい。あたしも付き合ってたげるから」

「いや…でも…もうちょつと待てば」

「なによ。『お姉さま』のいうことが聞けないって言うの？」

「真澄。職場で飲むのか？」

そりゃ父親が怒っても不思議はない。

「いや。これには事情がありました」

代りに課長が説明をした。

「ふむ。それも業務の一環なら仕方ありませんな。ならむしろ好都合。真澄。お前が知りたかったその体質にはまだ続きがあるんだ」

「え？ 酔うと女になる。そして場所にあつた服装に変わるだけじゃないのか？」

「それはただ酔った場合の話だ。混じり物のない『地酒』とかを飲むと影響力が段違いだ」

そう言えば経費と言うことで安物しか飲ませてないわね…桜子はそう思った。

「論より証拠だ。どうせ呑むと言うならこれを呑んでみる」
手渡されたのはドイツ産のビール。

「外国の酒がどうしたって？」

「いいから飲んでみる。半分で充分だろう」

服をフィットさせる都合もある。仕方ないので缶を開けて半分をゆっくり吞んでいく。

酒に強くない真澄はそれで充分に酔えた。

ぼんっ

そこに現れたのはOL服に身を包んだ真澄：ではない。

髪をオールバックにして軍帽を被り、そしてサスペンダー式のズボンをはいていた。

上半身には軍服を羽織っていて、下着もシャツもつけていない。

豊満な胸の先端をサスペンダーが隠していると言う、映画会社に怒られそうな衣装だった。

「さ…酒井君？」

さすがにこれは予想外の桜子が、恐る恐る尋ねる。

目の据わった真澄が右手を高々とかざす。

「ドイツの酒はアアアア、日本ーイイイイイ」

「と、まあ。世界の酒を呑むとその国のイメージに引き摺られてなあ」

「ぼやくように言う和水。」

「どうでもいいけど酒井。それ日本語おかしくないか？」

先輩の男性社員。越野が指摘する。

「まあやっぱり酔っ払いつてことだな」

これも先輩の竹葉ちくはが言う。

「なんだ貴様ら！ わたしに逆らうとはいいい度胸だ。軍法会議にかけてやるぞ」

「…なりきってる…」

年のそれほど変わらない菊水がつぶやく。

「多少は本人の持つているイメージも関係あるらしいんですよ」

さすがに他人の前なので口調は改めている和水。

「酒井ってミリオタ？」

「というかむしろドイツのイメージを間違えていると言っか…」

口々に評している。その間、当の本人はサスペンダーが一センチずれると大変恥ずかしい状態のままたずんでいた。

どうもいきなりハイテンションになったのはいいが、酔いがきつくなってきたらしい。

「面白いわね。じゃ次は…」

舌なめずりをしている桜子。それを悦子が止める。

「待って。今はまだダメ！」

「どうしてですか？」

「まだ心が女みたい。その状態で飲ませても前のが残っていて、お酒同士でケンカするのよ。そうなるとうつという特徴が出なくなるの」

「なるほど。今までは安いものばかり飲ませていた…つまり純度が低かったからこういう特徴は出なかったんですね」

しばらく待つことにした。

「酒井君。大丈夫？」

ほぼ裸の胸を押さえて蹲っている真澄に、上から尋ねる桜子。真澄は真っ赤な顔で上目遣いで見ている。

「大丈夫じゃないですよ！ 何でこんなきわどい服に…」

「あ。心は男に戻ったみたいね。じゃあこれいってみよう」

本当に僅かな量の液体を差し出す。

逃げられそうにないし、とりあえず酔えば別の服になるだろうし、女になりきってしまったえば女性服を着ている羞恥心も消えるだろう。

そう思ってその液体を飲んだ。

長い髪は二つに分けられて編みこまれ、それをぐるぐると「お団子」に。

化粧もアイシャドウの赤が目立つ。

そしてプロポーションをくつきりと際立たせたチャイナドレス。深いスリットがまぶしい太ももをちらちらと見せていた。

「あいやあつ。わたしまた酔ってしまたアルよ」

扇であおぎながらおかしな言葉の真澄。

「なるほど。紹興酒だからこうなるわけね」

中国の酒である。お爛して氷砂糖と言うのみ方もあるが、この場合は常温であった。

「うーん。しかし語尾に『アル』ってのは…最近のアニメだとまず変更されるからな」

「菊水。何の話だ？」

「いえ。なんでもないです。課長」

打ちひしがれる真澄。

「ああ…なんてべたな口調の中国娘を…」
そっちかい！

「ハイハイ。吞んで忘れましょうね。次はこれ」
これまた常温が適温であるスコッチウイスキーを飲むと…

真澄は一心不乱に掃除をしていた。

長い髪は纏め上げられていた。

黒いワンピースに白いエプロン。

「うん。やはりメイドさんはイギリスタイプに限るわね。アメリカンタイプはどうもねー」

桜子は女性と言うのにメイドに詳しいようだ。

やがて作業が終わりメイドの真澄が直立不動で桜子に報告する。

「桜子お嬢様。床掃除は終わりました。次はいかがいたしましたでしょうか？」

「そうねえ…」

従順なメイドと化した真澄を値踏みするように見る。そして悪戯するような表情に。

「よし。跪いて私の靴をお舐め！」

「仰せのままに」

本当に跪いて桜子の靴に顔を近寄せる真澄。

「いかん。止める」

課長の命令で引き離される二人であった。

壁に向かって体育ずわりしている真澄。黒いオーラが出ている。

「いいわねえ。今度帰ってきたらうちでもスコッチ飲ませて手伝わせようかしら」

あっけらかんと言いつ悦子。人事ではない和水は苦い表情で黙ったままだ。

「まったく…少女少女文庫向けだったからそれですんだが、18禁OKのところだったなら何をさせるつもりだったんだ？」

「そりや当然、殿方のズボンのチャックを開けさせて…」

「やめてください！！ ああ。自己嫌悪で消えてしまいたくなってきた…」

「はは。じゃ最後にしましょうか。ちょっときついから水割りにする？」

散々おもちゃにして満足したのか打ち止めを宣言。

これが最後と言うことでバーボンを飲んだら…

結果としてはテキサスのカウガールになってしまった。

「Oh！ カチヨーさん。今日は迷惑力ケマース」

やたら陽気に、それもおかしい日本語で喋る。

「よかった。これならうるさいだけだ。万が一ロデオとか称してバ

イクを馬に見立てて乗り回しだしたら飲酒運転だしな」

「そうですね。時節柄酔払い運転はいつも以上にまずいでしょうし」

立て続けに違う変身をさせられた真澄はくたびれて眠ってしまっ
た。

「まあ五時までやっていた扱いにしてやろう。その分は吉野君から
引きたいところだが」

「えーッ？ でもこれでやっちゃいけないことがわかったじゃない
ですか。ご隠居の前にメイドで出したらロストバージンくらいはあ
りえますよ。その危険を見抜けただけいいじゃないですか」

「……まあいい。えー……」

両親の前でおもちゃにしまっただけさすがに言葉のない課長。

「いいですよ。とにかく痛い目を見ればこれも自分がどれだけ因果
な体質かわかるってもんです」

「でも酔った勢いで他所の娘さんを妊娠させたりはしないでいいわ
よ」

「妊娠させられるかもしれないだろうが」

「十月十日も酔っ払えるわけないでしょ」

それが理由で過去に一生を女で過ごした先祖はいない。

老夫婦は同僚たちに向かって改めて挨拶をする。

「なにかとご迷惑をかけると思いますが、ウチの『娘』をよろしく
お願いします」

「確かに『娘さん』はお預かりいたします。どうかご安心ください」

両親と同僚に娘扱いされているとも知らずに真澄は酔いつぶれて
眠っていた。

翌朝。代休日。

「アー…昨日はひどい目にあった」

立て続けの変身で疲弊しての眠りだったものの、酔いそのものは軽くて朝には男に戻れていた酒井である。

トーストをかじりながらコーヒーをすすっていた。さらに新聞も「タバコ増税で値上げ…か…酒も200%くらい税金かけてくんないかな」

世界の酒好きをすべて敵に回しかねない発言であった。それほどまでにもう呑みたくはなかった。

チャイムがなったのでインターホンで確かめると桜子だった。

「とりあえずあがつちゃってください」と扉を開ける。

桜子はリュックサックをしょっていた。

「なに？ この荷物」

猛烈に嫌な予感が。

「うん。昨日の続き。安心して。ちゃんとつまみもあるから。ウオツカでしょ。ジンでしょ。テキーラでしょ」

色とりどりの酒瓶を並べ始める。酒井は思わず叫ぶ。

「酒税300%希望！」と

三杯目 呑まれたら童女？

酒井真澄の努める部署では朝礼がとりおこなわれていた。

そんなに大げさなものではなく、輪になった状態で一人の青年が挨拶をしていた。

「福岡支社からこのたび本郷支社に配属となりました山崎きららす。よろしくお願いします」

深々と礼をする。顔を上げると笑顔。少々演出過多に取れるが悪くない印象だ。

髪はやや長め。営業課ということを思うとちょっと冒険かもしれない。

精悍なタイプの好男子。身長はそれほど高くはないが引き締まった肉体をしていた。

それを包むスーツも値段は高くはないがセンスのよさを感じさせる。

しかし何より注目されたのはその「名前」

（きららす？ 男につけるにはちょっと度胸のいる名前だな）

三十台の社員。竹葉ちくはが率直な思いを抱くが口にはしない。

全員が同じ感想を抱いていた。

たぶん当の山崎自身も「そう思われている」と承知の上だろう。

「あー。ちょっとした事情でうちで仕事をしてもらうことになった」課長が説明する。ほんの一瞬、視線が酒井に向いていたように感じたのは当の本人。

（何だ？ 今の意味ありげな視線は）

だがすぐに視線が外れて桜子に向く。

「吉野君。今日は彼を君が案内して回ってくれ」

「わかりました」

課長が指示をして、部下が了承した。それで終わる話の筈だった。
「課長。できれば案内は女性よりも男性の方が」

それを切り出したのは山崎本人。

「そうか。それなら酒井も、まだ日が浅いな。菊水。頼めるか？」

二十代後半の男性社員に打診する。

「あ。はい。それはいいんですが…」

菊水は同僚である桜子に配慮する。

なにしろ「女よりも」と言われた形だ。「女のプライド」を考えれば面白いはずはない。

事実表情が硬かったのが感じ取れたが、山崎の台詞でその表情が一気に崩れた。

「お願いします。右も左もわからない僕にとって、あなただけが頼りなのですから」

低い位置からやや上目遣いになってすがるように。

ご丁寧に両手で菊水の手を包み込んでいる。

これで一気に機嫌の直った貴腐人。目を輝かせている。

「そうよね。女なんかより男同士よね。わたしったらヤボでごめんなさいねえ」

高く作った声でオホホ笑いをしながら身を引く。

「あ、あの…吉野さん？」

上機嫌の桜子と裏腹に青ざめる菊水。

助けを求めていた表情の菊水が「絶望した」といわんばかりの表情になったのを全員が気づいていたが見て見ぬ振りをした。

男は我が身に降りかからぬようにと。

女子は「こないいいものを生で見られるなんて」と。

空気を変えるべく課長が次の言葉を紡ぐ。

「あー。それじゃ吉野君。君には」

「はい。歓迎会ですね。それなら既にピックアップしてますよ」

元々有能だが酒が絡むとなおさら頭の回転が早くなる。

すっかり上機嫌の桜子が課長に言われる前にプリントアウトした

「くいなび」のページを見せる。

「相変わらず手回しがいいな」

苦笑する課長。それをよそ目に菊水相手に過剰なスキンシップをしていた山崎は

「あ、できれば個室のあるところがいいですね」とリクエストをしていた。

「あら。なーに。男同士二人きりになりたいの？」と余計な気を回す桜子に

「改めてする自己紹介でちよつとね」と。

一日の業務を終えて夜の街へ繰り出す一同。

予約していた「伊丹」というチェーン店に出向いた。

平日だったので楽に取れた。

山崎のリクエストどおりに個室だ。むしろ「隔離」という方がし

っくり来る。

掘りごたつ式の部屋に通される一同。

主役である山崎が「神座」。そこから時計回りで酒井。吉野。菊水。

山崎の向かい合わせで課長。ここから座席が反対側になり澤野。

宇良のOLコンビ。

31歳の中堅。竹葉が山崎の隣。

「それでは、山崎きらら君を歓迎して乾杯！」

課長自らの音頭でジョッキやグラスが掲げ上げられる。

桜子はいきなりコップ酒。酒井は烏龍茶。他は全員ビールの中生だ。

「いやあ。それにしても移動先にこんないい男たちがそろって嬉

しいですよ」

『女たち』の間違いと思ったかった菊水と竹葉。そして酒井。
「お前：もしかしてそっちの気があるの？」

ストリートに菊水が尋ねる。案内の最中やたらにスキンシップを
図られて辟易としていたが、もし『そっちの気がある』ならある意
味納得だと。

「いたってノーマルですよ。僕は」

「普通の男がやたらに男相手に触るか？」

「納得させてあげますよ。ただちよつと僕は酒に強いもんだから時
間が」

（何で酒が？……まさかつ！？）

一同が酒井を見る。当人も考えが及ぶ。

「さて。そろそろかな」

山崎が言つたとたんに彼の足元から煙が上がった。

「えっ？」

課長以外の全員が驚いた。特に酒井が驚いた。

時には予想が的中して驚くことがある。今がそのときだ。

（ま、まさか。しかし親戚にはこんな奴いないし）

そして煙が晴れたら予想通り山崎の姿はない。かわりに美女がい
た。

髪の毛は金に近い茶色のソバージュ。化粧もきつい。特にくつき
りとした口紅の赤さがケバさを醸し出していた。

暗い飲み屋でくつきりと見せる目的ならなるほどと頷けるメイク。
体にフィットしたヒョウ柄のワンピース。それが浮き彫りにする
ボデイラインは凄まじい。

胸はとにかく自己主張が激しく。ウエストのくびれも本物の女以
上だ。ヒップは文字通りの安産体形。

どこからどうみても女。それも場末のバーにいるようなホステス
のようだ。

「や、山崎君：なの？」

「はい。きららです」

若干ハスキーな声で可愛らしく返答する。

なるほど。酔えば女になるのがわかってれば最初から女で通用する名前をつけるか。

納得した一同である。

「キヤハハハ。ビックリした？　ねえビックリした。きららねえ、朝からもうこれをずっと楽しみにしてたのよお」

「悪戯」が成功してご満悦の姫様。

（同じやつが先にいればそりゃこっちにまわされるか。扱いなれてるってことだな）

同時にやたらに男である自分にモーションかけてきたはずだ…と菊水は納得した。

「もしかして課長。知ってました？」

サブリーダーでもある竹葉が尋ねる。

「ああ。ウチのせがれが似たような体質でな。それで任された。酒井の時は半信半疑だったか」

「はっ？」

桜子は慌ててバッグを手繰り寄せる。そして中から小型のビデオカメラを取り出す。

「酒井君のために購入したけど、まさか他にも使う相手が出るなんて」

どこから突っ込んでいいのか見当もつかない酒井だった。

そして桜子の期待通り。いきなり過激な挨拶：キスを菊水相手にかましているきららだった。

だが菊水より人生経験の長い竹葉はさすがに一度の失敗（VS真澄）で懲りている。

「ま、待てっ。山崎。お前は男相手にキスして気持ち悪くないのか」
「なんで？　今は女やけん。平気とよ」

どうやら女性化すると言葉遣いまで変わるらしい。

「大体ウチのとーちゃんからしてそうなんよ。大昔にご先祖様が呪われてその家系とか。とーちゃん直系なんだけど女になったの実は喜んでて。もう随分いろんな男の人と寝たらしいちゃ」

眩暈を覚える酒井。自分の父もそれに近いことを話していた。

（お、俺も酔ったらやばいのか？　だとしたら…そうでなくても絶対に飲みたくないが…）

「今でもほとんどは酔っ払って女で過しとーよ。だから素面するときも女装してて。アタシそんな環境で育ったから男相手も女相手も抵抗ないんよ。あ。でも女ときは男がいいやね。男のときは女も悪くないけど…」

妙に色っぽい流し目をする。

ほとんどの目が酒井に集まる。彼は「知らない」と首を必死になつて横に振る。

その間に隙を突かれて竹葉も唇を奪われた。

どうやらこの時点では女子は対象外らしい。そして当人たちも完全に傍観者である。

相撲で言うなら砂被りという状態で食い入るように見ている。

実際の「腐っている女子」はリアルな男同士の交際は恐がるようだが、この場合きららが女の姿なので普通にラブシーンであった。

そのため「男同士」の実感が乏しく「見世物」状態だった。

だがそうは行かないのは唇を狙われている男たち。

酒井自身も初日にやらかしているが今度は被害者になりかけている。

（そ、そうだ）

酒井はこの危機を乗り切るべく烏龍茶のコップをカラにしてビールをぐいっとあおった。

「さーさー。酒井さん。次はあんたの番やね」

本当に男好きらしく色っぽく迫るきらら。酒井は酔いが回るのを

待っていた。そして酔ったのを実感した。

「それでも…出来るか？」

赤い顔の酒井が言っていると彼の足元から煙が上がる。

「な、なんね？」

自分と父親だけと思っていた現象を東京で引き起こす輩がいる。それで充分驚けた。

煙が晴れるとやはりそこには美女がいた。

とにかく目立つ胸元。そしてOLの私服の様な服装。

「ア、あんた。アタシと同じ？」

「はい。どうやら親戚みたいでーす」

生真面目な男のときは打って変わって軽い乗りの真澄。可愛らしい声で言う。

「それじゃあんたの父親ってウチの父ちゃんの兄弟？　そういや酒井いうとったけどそんな珍しい名前じゃないしまさかと思つたら」

「親戚なのか？　しかし酒井の一族の呪いは男にだけかかるんだろう。苗字が違うなら…婿養子か？」

「そうたい。ウチの父ちゃんも母ちゃんに婿入りしたとよ。酒井は旧姓で」

「もしかしてお母さんって」

「うん。体は女だけど男みたいにしてるたい」

つまり逆転夫婦だった。

「そのせいかあたしもそんなに男だ女だと拘らなくて。初体験も二十歳の時に大学のイケメン相手やつたし…きゃっ」

可愛らしく頬を染めるきらら。照れて頬を押さえる。

菊水。竹葉はいわゆるどん引き。さすがの女子二人もフィクシオンというかファンタジーでない「これ」は恐いらしく表情が硬い。

しかし「筋金入り」の桜子は違った。

「ふっ。甘いわね。女の肉体で男を求めるのではただの肉欲。本当の愛は例え同性でも相手を求めるところにあるわ」

やたらえらそうに講釈する。

「だからあたしはノーマルやつて。今は女だから相手は男がいいんだよ。言うなればバイやね」

（それじゃ男の時にスルーされたあたしたちの立場は？）

ささやかに傷つけられたOL二人の女のプライド。

そちらには目もくれずきらは真澄に唇でなくてコップを差し出す。

「まさか転勤先で親戚にあえるとは思わなかったわ。乾杯しよ」

唇を守るために既に女性化している。今更呑むのを躊躇う理由もない。

そして酔って女性化したためか性格も軽めに変貌した真澄は軽やかに

「かんぱーい」とグラスを合わせるのであった。

「そう。きららさんのパパ。お爺ちゃんに勘当されてたのね」

すっかり女同士の関係になっていくきららと真澄。

ビールから始まりチューハイ。今はロックの焼酎。そのグラスを赤ちゃんのように可愛らしく持っていた。

度数がどんどん強くなる典型的な悪酔いパターンだった。

他の面々もセクハラ魔女二人で相殺されたことで安心して飲んでいた。

「そうらしいわ。あたしが十歳の時。だから母ちゃんの故郷の福岡に越して」

「あー。それで博多弁がちよつと」

「おかしいやろ？ でも博多の男は気がいいから誰もそげなことでバカになんかせんたい。まあベッドの中でよくからかわれはするけど」

「ベッドって…あの…男の人とそんな関係って凄い気が」

本来は男であることを考えると当然の発言。

「なにゆうてんの？ せつかく女にもなれるんよ。楽しまなくちゃもったいないじゃない」

（こういうのはダメポジティブといわんか？）

ツツコミを入れたいところだがまた自分に矛先が向いてはたまら
なので沈黙の菊水。

そんな胸の内を知ってか知らずかきらはますます饒舌になる。

酔うとテンションが上がるタイプだ。

「あんたそんなに綺麗でおっぱいも立派なんやから男も選り取りみ
どりやる。愛してもらいんさい。次の日には男に戻ってるから妊娠
もせんよ。ただ病気もらったらあかんからゴムはいるけど」

「やっぱり……気持ちいいんですか？」

興味津々の真澄。この時点では完全に身も心も女である。

しかも血筋らしく「積極的」になる傾向がある。

女としての「その感触」に興味を隠しきれない。

頬が赤いのは酔いか。羞恥か。

そんな真澄を優しい目で見ているきらら。表情にあつた穏やかな

口調で言う。

「愛されるのはとてもいいもんよ」

「そうですかぁ。どこかにいい男の人が……」

物干しそうな目を同僚の男子社員に向ける。硬直する面々だが

「酒井。まあ飲め。女は呑んだ方が（快感が増して）いいらしいぞ」

「え。そうなんですか？」

半信半疑の目を向ける。

「山崎を見る。飲んで気持ちよくなるからあれだけいえるんだろ」

「ああ。なるほど」

そういう風に言われると敬遠していた酒が急に大事なものに思え
てきた。

「わかりました。それならもつと飲みますっ」

既に酔ってて正常な判断が出来なくなっていること。そして「色
欲」が招いた結果として自ら飲み始めた。

「おーっ。いい飲みっぷりやね。女二人。とことんまで飲もうか」

「ちよつとお。あたしも混ぜなさいよ」

こちらは純正女子である桜子が乱入する。

どうやら貴腐人としてよりのんだくれプリンセスとしての方が上回った。

（ふう。助かった）

これはまた迫ってこれないための男子社員たちの企みだった。単純に酔い潰そうと。

普通は女性を酔い潰して「あーんなことやこーんなこと」をするのが定番だが、逆に身を守るためというから面白い。

桜子。そしてきららに釣られて真澄も限界以上に飲んでしまった。結局まともに歩けないほどになったため、またもや桜子の部屋で世話になることに。

「しょうがないわねえ。ちょっと。酒井君の荷物はどこ？」

後輩のOLに尋ねるが逆に二人は見知らぬ女物のバッグを差し出してきた。

「吉野先輩。これ先輩のですか？」

「……あたしこんなの持つてないわよ。あんたたちじゃ？」

二人も首を振る。仕方ないので持ち主を特定させるべくバッグをあけると女性物のバッグに似つかわしくない書類とか男性的デザインの手帳やサイフが出てきた。

「酒井君のみたいね？」

手帳に挟まっているクレジットカードの名義から判断した。

「本当に便利よね。本人が女になると身の回りのものまで変わるなんて」

その場は誰も気がつかなかった。多少なりともアルコールが回っていて正常に物を考えられなかったのかもしれない。

酒井が変身した時にそのバッグに触れていなかったことを。

なんとか真澄を連れて帰った桜子は真澄をソファに寝かせる。その際も真澄はうなされて「もう飲みたくない」とつぶやいてい

た。

「そんなの迎え酒で収まるわよ」

桜子としたらひとり言の感覚での返答だったが、しっかり真澄の耳に届いていた。

酔いで苦しみつづ真澄は「もう要らない。酒を勧めないで」と頭の中で繰り返していた。

そして「酒を勧められないためには」と考えがめぐっていた。

翌朝。

ひどい喉の渴きと頭痛で真澄は最悪の目覚めをした。

「おはよ。お姫さま」

けるつとした桜子がちよっぴり皮肉を込めて呼びかける。

「吉野さん…俺また…」

かすれる声で尋ねる。可愛い声もこれでは台無しであるが、意識だけは既に男に戻っている。拘りそうになかった。

「はいはい。酒のミスなんて忘れなさい。ほい。お水」

透明な液体の入るコップを渡される。

まだ苦しい真澄は何も考えずにその液体をあおって

「ぐえほぐえほぐえほ」

激しく咽た。

「目が醒めた？ 二日酔いなんて迎え酒で治まるわよ」

安物の日本酒だったのだ。

そのせいかさらにひどい酔いに見舞われる。

そして煙が出て新たな変身。

ここまでは桜子の予想の範疇。

しかしその姿を見て彼女は仰天した。

時間が経ち、始業時間に。

男子のほとんどが前夜の酒で苦しそうだが山崎はなんともない。

「……お前……酒強いな……うっぷ」

竹葉が言いかけてやめた。胃液が逆流してくる感覚がそうさせた。余談だが菊水の方は呑みすぎて下痢を起こしトイレに駆け込んで不在だった。

「ええ。博多じゃバイトでホステスもしてましたからね。客の相手に飲むうちに鍛えられたんですよ」

既に男の姿に戻っている。

「けど従兄弟は違うようですね。のんで仕事に支障が出ちゃまずいな」

酒井が従兄弟と覚えている。ちゃんと記憶もある。

逆に言えば女として男どもにキスしたのも覚えているはずだが、それに対しても平然としている。

「おはようございます」

妙に沈んだトーンの桜子の挨拶。

「吉野君。遅かったな……その子は？」

桜子は童女を連れてきていた。

セミロングをツインテールに。いわゆるボンボンで分けている。

黄色いワンピース。見た目は6〜7歳。真っ赤なランドセルをしょっている。

「きゃーっ。可愛い」

その愛らしさに宇良かすみは黄色い声を上げる。

「お嬢ちゃん。お名前は？」

澤野いずみもしゃがんで童女の視線にあわせて尋ねる。

「さかい　ますみです」

小さな子供らしい大きな声。やや舌足らずな口調で名乗る。

「はい？」

「さかいますみです。みなさん。おはようございます」

まさに小学校低学年のように元気に挨拶をする。

「えーつつつ」

さすがの課長もここでは驚いた。

「吉野さん吉野さん。本当に酒井さんなんですか？」

「本当よ。あたしが迎え酒で飲ませたらこの姿に」

（お前のせいだよ！）

全員がそう突っ込みかけていた。

「しかしなんだってこんな姿に？」

一同が同じ体質の山崎に回答を求めて視線を送る。

「いや：僕もこんなのは。ただ彼はかなり限界超えてましたからね。それで何か超越してしまったのかも」

「そうねえ。何度も『飲みたくない』とうなされて」

「つまり：もう限界超えたのにさらに飲んで」

「飲まされない姿。未成年になつたと？」

仮説が出来上がった。

「それにしてもここまで若返つたのはなんでだ？」

「そりゃこんな子供に飲ませるバカはいませんし。防衛本能みたいなもんじゃないすか？」

竹葉の疑問に菊水が推論を述べる。

「もう。そんな難しい話はあとあと」

いずみが真澄を連れて行く。

「酒井さん……真澄ちゃん」

同僚で年上の男性に呼びかける口調だったが、小さな女の子相手のそれに改める。

「お姉ちゃんたちとお写真を撮らない？」

「いいよ」

何の意味があるかといわれれば遊園地でマスコットと記念写真を撮るような感覚であろう。

代わる代わるケータイで収まっていたが

「はいはい。あたしが後でデータ送ってあげるから」

桜子が本格的なデジカメを取り出して撮りだした。しかも三脚まで使っている。

「……課長。いいんですか？」

見かねて竹葉が進言を試みるが

「ああいう体質はおもちゃになる運命なんだ。たぶん酔いが醒めれば終わるから放っておけ」

達観したこの一言で言えずじまい。

見た目と人格は小学一年女児だが、頭の中身は成人のままらしい。つまり仕事はこなしていた。

ただし椅子を目一杯高くしても机に届かず。

仕方ないので隣の応接室の机をデスク代わりにしていた。

椅子に使っていたクッションを座布団代わりにして正座して可愛らしく仕事を進める。

逆に仕事にならないOLたち。

真澄自身は妨害行為を働いてないが、その愛らしい姿にめろめろで何かと覗きに来るからだ。

「真澄ちゃん。書類出来たかな？」

菊水が取りに来た。

「はい。出来ました」

まるつきり小学生ののりで書類を差し出す。

「そうかぁ。いい子だねえ」

中身が酒井と知りつつもこの姿で可愛い態度では思わず頭をなでても無理はない。

真澄本人は照れて笑っているが

「菊水のお兄ちゃん」

「なんだい？」

「大好き。大きくなったら真澄がお嫁さんになってあげる」

「はは…そりゃどーも」

例えば子供の姿でも男に積極的な「魔性」は健在か。そう判断した。

一時ごろ。小学生の真澄が中学生になった。

身長が伸び、胸もささやかに膨らみ、着ているものも夏用の半そでセーラー服に変わった。

「酒井。その姿はまだ…」

「あ？ 何か文句あんのか？ おっさん」

「お、オッサン？ 27だぞ。俺は」

菊水がむきになる。

「二十歳越えてたらオッサンオバハンだよ。その年になってもこんな場所で机にしがみついているたあご愁傷様だな」

どうやら反抗期らしい。表情も言葉もきつい。

「お…お前…さっきは『お嫁さんになんて』とか可愛いこといつてたのに」

「ああ？ ガキのころの話しだろ」

今だってガキだろ。全員が心中で突っ込む。

「見てろ。あたしはこんなところじゃおわらねえ。いつかは世界に出てやる」

具体的に言っていないがどうやら芸能関係らしい。瞳がぎらぎらしている。自分が特別な存在と根拠もなく信じている。

（中二病って男だけかと思ってましたよ）

（本来は男の子だからじゃない？）

今度はかすみと桜子でひそひそばなし。

四時ごろ。さらに変身。ブレザー姿。身長はそれほどではないが胸はだいぶ大きく。

「どうやら高校生くらいか。酔いが醒めるにつれて元…：というのも変だが大人に近づいているらしいな」

「でも高校生ともなると結構色気が出ますね」

確かに肌の輝きも段違いだった。

「いいなあ。あたしたちもあんなころがあっただよね」

少し前に思いを馳せるOL二人。

「あたしはもう少し前になるけどね」

ややひがんだ感じの桜子。

「ああ。そんなつもりじゃ」

「ぷぷ。くくく……キヤハハハハ」

突然明るく弾けた笑い声が。女子高生の真澄だ。

「やだあーっ。もうなに。会社で漫才しないでくださいよー。やだもう。お腹よじれる」

「あー。箸が転けてもおかしい頃か。上の娘がそうだったなあ」
つぶやく二村課長。ちなみに厳密には娘は一人しかいないのだが、現状では三人娘に近い家庭である。

「酒井。笑ってないで仕事しろ」

サブリーダー。竹葉が引き締めるべく怒鳴りつける。

「やだ。怒っちゃいやですよ。お・じ・さ・ま」

「おじさま!？」

例え女子とはいえど「おっさん」「おじさん」といわれるとむかつくが「おじさま」ならちよつと言われてみたい。そんな男心だった。

だが我に帰る。

「大人をからかうな」

「はあーい」

可愛らしく舌を出す。

残業。緊急性はなかったが、全員真澄の変転を見届けたくて居残っていた。

その合間にちよつと一息。

いずみ。かすみに真澄が加わり男性アイドルの話しをハイテンションに繰り広げていた。

「そろそろじゃないか」

ボン。煙が上がり「いつもの」OL姿になる。

「おー」

「女子大生は飛んだね」

「大学生じゃコンパとかで飲むから無意味なんですよ。それで一足飛びにあの姿になったようね」

つまりだいぶ酔いが醒めてきていた。

「課長。チェック願います」

落ち着いた事務的な口調で提出する。

「おー」

「やっとここまで戻ったか」

周辺はほとんど仕事自体は片付いて真澄の変化を見届けていただけ。

「はい？」

首を傾げる大人の真澄。

「まだ意識は女のままみたいね」

「明日が楽しみですねえ」

翌日。やっと酔いが抜けて男に戻った酒井。

（あーいて。頭痛いぞ。また何かやっちゃったのか）

このころにはもう女として暴走した程度では動じなくなっていた。しかし頭が冴えるにつれて脳裏に蘇える「若さゆえの過ち」

酒井は自分でも頬が熱くなるのが実感できた。布団にもぐりこむ。

（こ、これはきつい。なんで「女の子」としての記憶まで出来るんだ？）

誰とも顔を合わしたくなかったが、根が真面目な酒井は当日に休むなどということが出来なかった。

かなり気が進まない状態で出社する。そして

「おはよう。真澄ちゃん。今日は挨拶しないの」

ケータイの待ち受けで童女バージョンを見せられる。

「酒井君。女優になるつもりでも枕営業はダメよ」

桜子にはこれを揶揄され

「さ、酒井。もう一度変身して『おじさま』と言ってくれないか？」
真面目な竹葉にまで言われる始末。

覚悟してきたつもりだったが赤くなったり青くなったり。

その肩を叩く女の手。

「山崎……って何でいきなりホステスに？」

「酔っ払ってしたことなんて仕方ないことやね。飲んで忘れるが一番よ」

ちゃっかり「中州のホステス」になっていたきららの差し出すコップ酒。

羞恥から逃れるべく酒井はそれをぐいっとあおるのであった。

こうして酒井真澄は「酔っ払って女の子らしく振舞った記憶」にくわえ「既に成人男子なのに未成年女子の恥が次々と追加される」という不幸体質に開眼した。

そして周辺でこれに同情するものもなく。むしろ面白がっていた。不幸の度合いは増す一方であった。

飲まなきゃやってられないほどに。

四杯目 呑まれたら小さな恋？

土曜日。けだるい昼下がりも過ぎ、そろそろ夏と言つ季節でも太陽が西に傾くころ。

本来なら休みであるのだが吉野桜子。山崎きらら。そして酒井真澄の三名は休日出勤で仕事をしていた。

「よし。終了」

25歳のOL。桜子の声が明るく響く。

「こつちも終わった」

同じ歳の男性社員。酒井真澄も答える。

「それじゃみんな完了だね」

もう一人の男性社員。どことなく酒井に似ている山崎きらら。彼だけは年がやや上。

「まったく。『月曜にプレゼンやるから資料頼む』なんて簡単に言わないで欲しいわね」

肩を叩きながら桜子が言う。OLと言つことで制服姿。

「まあまあ。それよりどうかな。夕食には早いがこつちなら」

きららは杯をあおる仕草をする。こちらはグレーのスーツ姿。ただし上着は椅子にかけてある。

六月下旬。そろそろ冷房の欲しいころ。

「いいわね。お疲れ様つてことで」

酒井。山崎両名はこの支社に来てまだ日が浅いがそれでも打ち解けていた。

それは山崎の仕草に現れている。

酒井真澄。山崎きららは男性。吉野桜子は女性だが色っぽい関係にはなかなかならない。

飲み友達になってしまっている。

もっとも酒井はもっぱら巻き込まれてである。

彼はある事情から成人式を五年前に終えた身でありながら酒を飲んでいなかった。

「俺は勘弁してくれ。何度も同じ失敗をしているんだ」

濃紺のスーツの酒井が渋面で言う。その忌まわしき体質ゆえに。

「あらあら。それじゃ一人で帰ってわびしくご飯。寂しいわね」
からかっている。あるいは挑発するかのように桜子が言う。

「そんなのはいつもだよ。あんたらにつきあうと大変なのは学習している」

「まあまあ。酒井君。君はご飯を食べるということはどうだい？

それとも従兄弟の僕の言うことでも聞いてもらえないかな？」

「う……」

そう。互いにこの支社で出会うまでは知らなかったがこの兩名は従兄弟であり血縁関係である。

そしてそれゆえの共通することがある。

それを酒井は忌み嫌い、山崎は楽しんでた。

「そーよー。それに一人下戸がいると後は安心して飲めるしね」

「ブレーキ役かよ？」

と突っ込んだもののふと考える酒井。

（だけど確かにこいつらだけだと何しでかすかわからん。かわりたくはないが）

むちゃくちゃながらも楽しそうに食べて呑む二人と、一人でご飯の自分。

それをイメージしてしまい寂しさが募る。

「わかったよ。ついていってやる。だがあまり無茶するんじゃないぞ」

「さすがは僕の従兄弟。話が早い」

「それじゃ片付けに掛かりましょ」

会社を出た酒井と山崎はスーツ姿のままだが、制服姿だった桜子

は通勤用の私服である。

休日だが出勤と言うことでクリーム色のレディースーツ。

ただ暑くなってきたこともありストッキングはない。ブラウスも薄いピンクと平日は着ないようなものだ。

「さあ。いくわよ」

本来なら休みのところを拘束していた仕事から解放され、その拘束されていた鬱憤を晴らすべく彼女は力強く進んで行く。

むしろ酒が彼女を呼んでいる？

ついていく酒井は苦笑するだけであつた。

午後五時。

たいていの飲み屋の開店時間だ。

桜子の先導で一同は古ぼけた居酒屋に來た。三人は店の看板を見上げる。

「『きりやま』……変な屋号だな」

飲み屋には向いてないのではないか？ そう酒井は思う。

「単純に主の名前じゃないのかな」

従兄弟が続く。

「名前なんてどうでもいいでしょ。ここは肴もお酒もいいのがそろっているのよ。いつかつれてこようと思っていたの」

桜子が扉を開け明るく挨拶して中に入る。ここの主とは懇意のようだ。

山崎。そして酒井も暖簾をくぐる。

テーブル席に案内される三人。若い男性店員が注文を取りにくる。

「二人はなにを飲む？」

「僕は明鏡止水をロックで」

山崎の言うのは焼酎の銘柄である。

念のため言うが呑むとスーパーモードに突入するわけではない。

「俺はウーロン茶でいいよ」

「『ウーロン』ね。わかったわ」

何か含む笑顔の桜子。店員をスルーして明るい声でカウンターの主に注文をする。

「きりやま隊長：ごめん。かんじゃった。大将。明鏡止水をロック。それと『ウーロン』。あたしはいつもの」

「なにっ!？」

壮年の店主は振り返り尋ね返す。

「だ・か・らあ。彼は『ウーロン』ね」

疑問点が解消されたらしく主は仕事に掛かる。

それぞれの飲み物が運ばれてくる。

山崎の前には透明な液体に氷の入ったグラス。

桜子の前には一升瓶まるごと。

「豪快だね」

山崎も驚いている。

「いちいち注文する面倒なくていいでしょ」

笑顔で答える桜子。

「女は肝臓が小さくて男より酒に弱いときいた覚えがあるが、例外と言う物はどこにでもあるものだな」

ジョッキに氷とともに入れられた「ウーロン」を手に酒井が言う。

「それじゃ乾杯しましょ」

桜子は手酌で中身をコップに注ぎ込む。

飲めない…正確には「飲みたくない」酒井はともかく、両名ともに「とりあえずのビール」を飛ばしていきなりこれだ。

「おしごとおつかれさまあ」

こういわれたら乾杯に応じるしかない。

酒井もグラスを鳴らし、そして飲み物を飲む。

（なんかえぐい味だ。まあウーロン茶ってそんなものか）
そう言う意識があり『味の違い』に気がつかなかった。

山崎が最初の一杯を空ける前に酒井に異変が起きた。

足元から煙が上がり仕事帰りのOLと言う感じの美女に変貌した。長い髪。イヤでも目に付く大きな胸。化粧した顔は酔いのせいで目元がとろんとしていた。

「な…なんれ？ あたしお酒飲んでないのに」

「ふっふっふ。真澄君。君はウーロン茶を飲んでいたと思っていたようだが、世の中にはウーロンハイと言うものがあるんだよ」

まるで探偵物の主人公のように「種あかし」をする山崎。もっとも仕込んだのは桜子だが。

真澄が口にしたのはウーロンハイ。チューハイの一種でウーロン茶で割る。

ちなみに単に『ウーロン』と注文したらアルコール飲料。

『ウーロン茶』ならお茶がくる。

だから店長は確認のために聞き返した。

酒井はその辺りを理解していなかったので引がかかったのだ。

「そろそろ僕も…ひっく」

言うなり山崎も美女へと変身した。

こちらはまるでホステスである。金に近い茶髪。ボディライン浮き出しのワンピース。ハイヒール。そして「夜の蝶」らしい厚化粧。度数が強いにも関わらず山崎の変身が遅かったのは単に酒に強いから。

酒井真澄。山崎きららの先祖は普段はマジメだが酒癖の悪い男だった。

酔った勢いで村娘に対して今で言う「セクハラ」をしていた。その結果として娘達の「のろい」で酔うと女になる体質に。

「身をもつて女の思いを知れ」と言うことだった。

そしてそれは末代まで続く呪い。

つまり子孫の男子達も酔うと女になる体質なのである。

ついでに言うとセクハラぐせも受け継がれているらしく、やたら淫靡になる傾向がある。

素面だとマジメな酒井とて例外ではない。

これはまるで酒に酔ったのそれとよく似ていた。

酒に酔うとリミットブレイク…ではなくリミットが外れてしまう。たがが外れてしまうのだ。

真澄。きららの場合は性転換まで伴う。

目を丸くして驚いている若い男性店員。

「たいちょ…大将。見ましたか？ 今のお客さん達。男が女に」

「そんなバカな話があるか。北登」

「本当です。僕はこの目で見たんです」

「いいから仕事しろ」

大将はなじみの桜子の印象だけ残っていたのだ。まして同性相手に興味がなく、それで覚えなかったのだ。

「もう。だますなんてひどいじゃないですかあ」

やたらかわいらしい声で講義する真澄。

あまりに可愛くて「ぼんこつ」と表現したくなるタイプの声だ。動物の尻尾にむやみやたらに興味を示しそうだ。

「ええやん。これで女三人。気楽に飲めるタイ」

きららは生まれ自体は東京なのだが十歳から大学卒業。そして就職して現在の支社にくるまで福岡で過ごしていた。

それゆえか女性化すると博多弁が出る。

生粋の博多っ娘じゃないからか？ あるいは酔うからか怪しげな方言だ。

きららはこの体質を父親を見て知っていた。そして性転換を楽しんでいる。

実の所ベッドの相手は男の方が多い。

対する酒井：真澄はやはり本郷支社に春からの移動。

その歓迎会で生まれて初めて酒を飲み、そして初めて変身した。当然ながら部署の人間は驚くが妙に冷静な上司の計らいもあり、受け入れられていた。

…と、言うよりも厳密に言うところの「おもちゃ」になっていた。酔うと淫乱になるのは同じだがこちらはやや「清纯派」。ずばり言うところ「カマトト」「ぶりっ子」といえるタイプ。女に言いがかりをつけられるタイプの女になる。

「そうそう。明日も休み。女三人でのみあかしましょー」

吉野桜子は二人と違い生粋の女性である。

だが明らかに一番ひどい「のんだくれ」は彼女である。

高校時代は文武両道の生徒会長を務めていたような声だ。

現在は合気道師範をするのんだくれプリンセスと言う感じである。

「あたしそんなに飲めないのにーっ」

ジョッキを両手でもって可愛い声で叫ぶ真澄。

とはいえどこの二人にかなうはずがない。

既に変身してしまったのだ。その点だけならもう構わない。だから結局は押し切られて飲み始めた。

「ほら。真澄ちゃん。これ美味しいわよ」

「とみの…ほうざん？ お酒ですか？」

「鹿児島の焼酎よ」

きららからボトルを渡される。

ラベルで確認。確かに鹿児島産だ。

「へえー。なんだか美味しそうですね」

産地のイメージに左右された。

「おじさま。コップくださいーい」

場違いな「おじさま」と言う呼びかけに照れる主。

真澄のイメージでジュース用とでも思ったか、カーリーヘアの丸メガネの目つきのきつい女性キャラの描かれたタンブラーを運ばせた。

「それじゃ」

真澄はまるでミネラルウォーターでも注ぐように半分まで焼酎をいれる。

（うわぁ）

美人ばかりのテーブルに他のテーブルの男性客がなんとなく視線を寄せていて、そしてこの様子に心中で声をあげていた。

真澄は注いだそれを氷もお湯もなくそのまま口にする。その瞬間、激しくむせた。当然の結果である。

「無茶よぉー」

といつつ「面白そう」と静観していたきらら。

桜子に至ってはビデオカメラで撮影までしている。

「さ、桜子さん。いつもそんなの持ち歩いてるんですか？」

落ち着いた真澄が尋ねる。

「だってあなた達といたら面白いことばかり。撮影しない手はないわよぉ」

「見世物じゃないですう」

年齢的には真澄と桜子は同じなのだが、どういうわけか肉体に伴い精神も女性化した時は年下であるかのように振舞う。

これも可愛く見られたい「女心」と思われる。

「さぁさぁ。明日は休み。今日は飲むわよぉ」

桜子のこの言葉。単なる乾杯の音頭ではないのが後にわかる。

五時から初めて悠に四時間。午後九時を回ったところ。

この時間から来る場合、既によそで飲んできているケースも多々ある。

それだけに多少のことでは動じない。

しかし美女三人が甲高い声で下ネタを展開していたのにはさすが

に驚いていた。

正確には二人。真澄はおとなしくちびちびと飲んでいる。

ノナルコールを頼むと二人が勝手にキャンセルしてもっと強い酒を頼んでしまう。

「大将。アブサン頂戴」

そう桜子がオーダーした時は何故かやたらに長いバットがもってこられたりしたが、とにかくもっと強い酒を飲まされるので比較的程度の低いものをちびちびとつきあっている。

「だからあ。こう。こうしたほうが気持ちええんよ」

いふなりきららはゆでた特大ソーセージを口にくわえる。
噛み千切らず嘗め回している。

男性客はあまりの「攻撃」に逆に言葉を失っている。

「えー。そりゃあなたは知っているでしょうけど」

もちろんきららの正体を知るゆえの桜子の発言だ。

彼女は体験のしようがない。

「……ところでそのときあなたは男？ 女？」

「男にきまっとるたい」

「きやーっ」

黄色い声を上げる腐女子。

「あ。いうとくけど相手は女の子よ」

もちろんその時点できららは男だからなのだが、聞き耳立てていた他の客は仰天する。

（お…女同士でそんなことを？）

「なんで？ どうして男同士じゃないのよ」

桜子は筋金入りの「腐女子」だった。

基本的には二次元好きだが、この時点じゃ単なるバカ話のせいだ
三次元でも平気な桜子。

顔色が変わってないもののしたたかに酔っ払ってもいるせいでも
あろう。

別に女性が下ネタを口にしていけないわけではない。

ただ例えば男性であれ程度によつては引かれる。

ましてや女性となるとなおさらである。

この場合きらは本来男でわからなくはないが、相手を務めていたのは元から女性である桜子である。

真澄が赤いのは酔いのせいか羞恥のせいか。

「……きらさん。その…男の人ともその…」

頬を染めていいにくそうにしている姿が、先刻のきらの「ソーセージ」とは別の攻撃を男性客にヒットさせた。

（か…可愛い）

清純派に見えたせいだ。

「なんね。あんたまだやつたんかいな」

上から目線のきらら。

「ど、どうせ私はおこちゃまですよーだ」

可愛い声で拗ねると余計可愛らしい。ただしもっと幼く見えるが。なんならここのお客さんに相手してもらったらどう？」

きららのとんでもない提案にむせ返る男性客。

むしろ「ソーセージ」の件といいからかつて遊んでいる節がある。

「んー。それいいかも」

立ち上がり歩き出す。

実行に移す真澄もかなり酔っ払っている。

別テーブルにいるサラリーマンの一人。

スーツを椅子にかけ、ネクタイを緩めてラフな感じに。

やはり仕事を追えて翌日が休みで飲みに繰り出した。そんなところ。

そこにますみがふらふらと歩み寄る。

ただ歩いているだけなら気にも留めないが明らかにこちらを目指しているので注目する。

ましてや正体はともかく今は可愛いタイプの巨乳美女。

思わずちらちらと見てしまうような相手が向こうからやってくる。さらには一番手近な男性客。メガネの細身にしなだれ掛かる。

赤く染まった頬。潤み瞳。上目遣い。高めのややロリータ気味なアニメ声で

「おにいさぁん。私とおつきあいしてくれませんかぁ」

こんなことを言われたらたまらない。

だがさすがにいきなり「食いつく」ことはなく戸惑うばかり。

「えっ？ 今なんて？」

当然の反応。そして予想の斜め上のリアクション。

「もう。恥ずかしいんだから。二度も言わせないでください」

言いながらメガネのサラリーマンのワイシャツのボタンをその細指で外して行く。

「ちょ、ちよつと」

掟破りの逆レイプか？ 身の危険を男の方が感じた。

「お客さん。やめてください」

店員が止めに入った。

「あん。もう」

文句を言う真澄だが店員の顔を見る。

「あら。あなたも結構可愛いかも。お願い。私を女にしてください。まだ経験がないんです」

その場で口に含んでいた全員が一斉に吹き出した。

それももつともだ。

「吉野さん。つれて帰ってくれる？」

とうとう大将に追い出された。他の客の迷惑と言うことだ。

「きやははは。いい物見せてもらったわぁ。それじゃ河岸を変えましょうか」

メストラ三匹が出ていった後で誰かがつぶやく。

「痴女がいた……」と。

まだ十時。宵の口。次に三人が訪れたのはきららの案内した店だ。
「ここって……」

店の看板に男の写真がでかかとはってある。
タイプは違えど美男子ばかりだ。

「そ。ホストクラブやね。女ならではの遊び」

「いいわね。一度来て見たかったのよね」

一番先導しそうな桜子だが、飲んでいるうちに「行こう」と言う
その意識をなくしてしまうのでまだ来たことがなかった。

当然ながら本来は男の真澄も初めて。

その「初めて」がもろに現れた。

体育会系のホストに愛想を言われてメロメロになってる真澄。

「可愛いね。君」

もちろん女性客をもてなすのが仕事の彼らである。容姿を誉める
のは当然。

真に受けないものの悪い気はしない…それは最初から女性に生ま
れ育ったもの達。

子供時代をすっ飛ばしていきなり成人女性になった真澄はその言
葉を真に受けた。

「ほんとう？」

やたらに潤む瞳で上目遣いで見上げる。

プロであるホストが一瞬だがどきりとさせられた。

（やべ。この客マジで可愛い。まじいな）

傍目にも敬遠にかかっていたが真澄本人はその「酒癖」もありど
んと迫る。

また追い出されてはたまらない。桜子がさすがに止める。

「はいはい。さか：真澄い。飲みましょ。これなんて美味しいわ
よあ」

「で、でもいい男が」

頬の赤みは酔いか恋心か。とりあえず「本来は男なのに女として

色々やらかして恥入っている」と言うのは現時点では女心ゆえにないが。

「まあまあ。まずは景気付けに一杯やりましょ」

「えーっ。さっきのお店であんなに飲んだのに」

「この店じゃ飲まないとホストが相手してくれないわよ」

あながち嘘でもない。

完全に「イケメン」に目がくらんでいる真澄はしぶしぶアルコールを口にした。そして

「やだこれ！？ 美味しい」

「でしょう。とつても高いシャンパンよ」

「これなら私でも飲めます。あーん。美味しい」

一瞬で関心を切り替えた辺り桜子の酔っ払いのあしらい方はかなりのものだった。

ちなみに真澄達をおとりにしてきららは可愛いタイプのホストを押し倒して速攻で唇を奪っていた。

まったく躊躇いはなし。同性相手と言う言う意識はない。完全に自意識が「女」である。

ホストクラブを出た時は三時。

飲み口のよさで深酒になって来た真澄はかなり危なっかしい状態だ。

「まったく。あのくらいで情けないわね」

桜子が責めるがこの場合で普通なら『飲みすぎよ』と責めるところだが正反対である。

「はいはい。うちは飲み足りないっちゃ」

どこかの鬼娘を彷彿とさせる言葉遣いできららが言う。

ホストにかまけて彼女としてはさほど飲んでないのである。

「うーん。でも今からじゃ半端よね。それじゃ始発まで」

桜子の先導でコンビニエンスストアに。

そこでさまざまな種類のアルコール飲料とつまみを買い込んだ。手近な公園のベンチで酒盛りを始める女二人。真澄はダウン中。とうとう朝日を拝む羽目に。

そのころには全員ダウンしていた。女三人で仲良くベンチで寝ていた。

朝。六時。とある集合住宅の一室。

野球帽をかぶった少年がそつと出てきた。ジャージ姿である。

十歳の彼は細身の少年。ごく普通の子供だ。髪は短め。スポーツマンと言うイメージ。

どこか未来ある少年とは思えない落ち込んだ表情である。

しかしそれを振り払うように首を振り、そして自らを鼓舞するように走りながら降りていった。

彼・武本雅彦の習慣なのか家人は誰もそれを不審には思わない。

それから三十分。

徹夜で飲んでいた桜子ときらはさすがに酔い潰れてベンチで寝ていた。

通りに面したベンチなのが幸いしてか暴漢などにも襲われずにすんでいた。

真澄の場合は元々強くないのに飲みすぎて既に二日酔い状態。

脱水状態から強烈な喉の渴きを覚えて目が覚めた。

アルコールの残る頭は彼女を未だ女性としての精神状態にとどめていた。

「……………お水」

公園だから水飲み場はある。だが桜子の傍らにカラフルな缶飲料が。

ウーロンハイを知らなかった真澄である。缶チューハイをジュースと勘違いするのも不思議ではない。

彼女は何の疑問も持たずに飲み口を開け、そして中身を一気に飲

み干した。

「やだこれ……」

飲み終わってからアルコール飲料と気がついた。そして足元から煙が上がる。

野球帽の少年。雅彦は公園から煙が上がったのをみて気を引かれた。

普段はジョギングのコースにはいない公園に入り込む。

成人女性二人が酔い潰れて寝ていた。それだけならわからなくはないが、何故か小学校低学年くらいの女の子がいる。

ツインテール…と言うよりもっと短いキャンディーヘア。

ワンピースが愛らしさを醸し出す。

そして何より人懐こい笑顔だった。

明らかに初対面である少年に笑顔を振りまいた。

少年・雅彦もつられて笑美を返す。そしてごまかすように質問をする。

「君のお姉さん達？」

少年はまず単純に考えた。この女の子はだらしのない大人二人の世話をしていたのでなかるうかと。

「うっん。お友達」

雅彦は混乱した。

彼の少ない人生経験でも酔い潰れた二人が二十台と言うのは見当がつく。

一方どう見ても自分より年下の女の子。それが友人関係？

「僕、武本雅彦。君は？」

しつげがよいのか相手の名前を尋ねる前に名乗る少年。

その幼女は元気よく返答した。

「さかい　ますみです」

先祖にかけられた呪いゆえに酒に酔うと女性化する酒井一族の男

子。

その中でも変り種だったか。真澄は「もう飲めない」というところからさらに飲むと年齢退行を起こす。

推測では「これ以上、飲まされない姿」と言うことで「子供」になるのではないかと思われていた。

女性化すると酔いも手伝い精神的にも完全に女性化する酒井一族の男子。

真澄の場合はさらに年齢にあった思考になる。
平たく言うと現在の真澄は7歳の少女そのものである。

「おにいちゃん。なにしてんの？」

まだ早朝ラジオ体操の時期ではない。

「トレーニング。でも… やっても仕方ないかな」

「なんで？」

無邪気に尋ねる童女。少年はつい「縦人に言っても仕方ないこと」を話す。

誰かに聞いてほしかったのかも知れない。

「この前の試合でエラーして…… 監督にレギュラーから外すと言われたんだ」

少年野球の二塁手である彼は前回の試合でタイムリーエラーをしてしまった。

そしてセカンドのポジションを争うライバルが次の試合のスタメンとなった。

それで落ち込んでいたのだ。

「あいつ上手いからなあ。僕はもうレギュラーに戻れないかも知れないし……」

「野球、やめようかな」と言いかけてたら真澄が抱きついてきた。

「わっ。真澄ちゃん」

「お兄ちゃん…… かわいそう」

その感受性の強さで同情してしまい、思わず抱きしめて涙してし

まっただのだ。

「……困ったなあ」

以前にも慰められたこともあったが、まさかここまでしてくる相手がいるとは思わなかった。

それも初対面で。

雅彦は困惑するがそれでもこの優しい少女の心遣いに暖かいものがこみ上げていた。

そして……それをこっそり見ている二人のよいどれ女。

「目が覚めたら面白いことになってたバイ」

目覚めてすぐに缶チューハイを口にするきらら。彼女の場合は女姿の維持も目的。

「持つててよかったわあ」

桜子もさりげなくビデオカメラを回している。「ラブシーン」を余すところなく収めている。

「お兄ちゃん。元気出して」

涙の残る目で下から見上げる真澄。

まだ「色恋沙汰」には目覚めていない雅彦だがドキツとなった。

もしこれで目覚めたら「男相手」に目覚めたことになるが知らぬが仏。

「そうだ。大きくなったらまずみがけっこんしてあげる。だからげんきだして」

「け、結婚!？」

いくら子供でも言うことが突拍子もなさすぎる。

当然である。

童女の姿ゆえ忘れてしまいが、酒井真澄は絶賛酔っ払い中なのである。

酔っ払いの理屈にまともな理論など通用しない。

ベンチの二人にも聞こえる高い声での結婚宣言。

大声でキヤーキヤー言いたいのをこらえて静かに盛り上がるきらと桜子。

「確かこの前もいつてなかったかしら？」

「見境無しとはさすがあたしの親戚タイ」

「酒井君って中年好みかと思ってたらあんな子供に。むしろシヨタだったのね」

好き勝手にいっているが現状では言われても仕方ない。

「え……ええええ！？」

人生経験の浅い少年でも「結婚」の重さは理解出来る。言葉ではなく感覚で。

そして反応は大人の男と同じ。たじろいだ。

「お兄ちゃん。目をつむって」

かわいらしく言う真澄。童女ゆえに「色気」はないが「可愛さ」ならある。

それにやられ、またたじろいで半ば思考が麻痺して言われたままに目を閉じる。

「しゃがんで」

このおかしな要求にも従ってしまうのは少年の素直さゆえか。

おかしな状況に不安になっていたらとどめとばかりに唇に柔らかいものが押し付けられた。

（！？）

思わず目を開けると至近距離に真澄の顔。あわてて引き離す。

「なにをするの？」

「えへへへ。お嫁さんになるならチューしてもいいんだよ」

子供ゆえの短絡思考ではない。酔っ払いの「つながらない思考」である。

ベンチのメストラ二匹はそろそろ寝たフリがきつくなってきた。体勢もあるがあまりに真澄の行動が面白すぎた。

「もうー。かわいいなあ。ちっちゃな恋人。ほんとに嫁に行けばいいのに」

「酒井君ってあの年でもキス魔なんだ」

完全に野次馬ゆえに無責任な感想を述べていた。

そして新たな展開。少年が声をあげて逃げ出した。

「根性なしやね。そんなんじゃ将来女を押し倒すこともできんよ。あたしなんかこの前シャワー浴びてる最中にもう始められて」

「しょせん男はそうなのよね。いざとなると逃げ出すし」

本当に好き勝手な「ガールズトーク」だった。

逃げられた真澄はしょぼんとしてベンチに戻ってくる。

きららと桜子は寝たふり。それを起こそうともせず真澄自身も眠ってしまう。

男の子がいなくなった事で緊張が解けたか眠気が戻ってきたようだ。

あるいは逃げられたことで不貞寝なのか？

とにかく可愛い寝息を立てて童女は眠り始めた。

入れ替わりに桜子ときららが起きる。

「あたた。体がバキバキいってるバイ」

「ほんと。でもいいものを見せてもらったわあ」

桜子はビデオカメラを取り出す。次いで真澄をみる。

「可愛い唇なのにもう男を知っているのね」

「……桜子さん。それはちょっと……」

雅彦は自宅に戻り朝食を摂っていた。食べながら公園での出来事を振り返っていた。

（びっくりして逃げてきちゃったけど…悪いことしたのかな？）

優しい少年であった。

ほとんど通り魔にあったようなものののに相手のことを案じていた。

（ちっちゃな子だったからきつとよくわかってなかったんだ。どうしよう。謝った方がいいのかな？）

そう考え出すとそちらに傾く。

彼は急いで食べるとまた出て行った。

時刻は八時を回ったところ。

きららの膝の上ですやすやと眠っている真澄。

見守るきららもいつものけたたましさが消え、優しい目をしている。

「……母と娘みたいね。あんた達」

桜子の感想。実際は男どうしなのだが。

「うふふ。あたしが子供産んだらこんな感じなのかなって思ってたばい。行為だけなら何度もしているけど妊娠はしたことないし」

「してたらまずいでしょうが」

そんな会話をしていたら真澄が目を覚ました。

「おしっこ」

「ああ。お手洗いはあっちゃね」

「うん」

小さな体で走るさまは本当に可愛らしい。

入れ違いになるかのように雅彦が公園にきた。仰天するきららと

桜子。

（な、何であの子がまた？）

（単に地元なんじゃない？ 誰か探しているのかしら。まさか酒井

君？）

桜子の見た通り雅彦はあちこちを見ていた。その視線がトイレに向かったとき、黒いセーラー服の少女が出てきた。

背中までのロングヘア。長めのスカート。そしてやたらにきつい顔つき。

（あらあ？ トイレの中で少し戻った見たいね）

（いっぱい寝とったもんなあ）

そう。この少女は真澄が中学生になった姿だ。

飲みすぎてしまうと防御のため飲まされない姿へと変貌する。

それが童女姿。

そして回復してくると少しずつ本来（？）の大人の女性姿に戻って行く。

この中学生バージョンはその途中と言うわけだ。

そして本人が「中学生」に抱くイメージが「反抗的」だったため、それがそのまま真澄に反映されてやさぐれていた。

（あのお姉さん。怖い。係わり合いになりたくないな）

雅彦少年の反応はもつともだ。彼はさりげなく視線をそらし、その場を去ろうとしていた。

「逃げてんじゃねーぞ。ガキ」

童女の時と打って変わって攻撃的な口調だ。雅彦は震え上がる。

「そうやって逃げ回るのか？ エラーしたことから。レギュラー争いから逃げるのか？」

雅彦はぎよつとなった。

なんでこんな見ず知らずの女子中学生がそんなことを知っているの？

よくみれば7歳の真澄と顔が似ているのはわかる。

しかし同一人物とは思うわけがない。

（真澄ちゃんのお姉さん？）

きわめて普通の回答を導き出した。

「だってあんなエラーしたら…もう使ってもらえないよ」「半ばトラウマになりかけている。」

「バツキャロー。てめえそれでも男か」

まだ大人になりかけの「幼さの残る声」で怒鳴りつける。思わず顔をしかめる雅彦。

あたりの人間は観て見ぬふりだ。

しかし見ぬふりどころか桜子はきつちりビデオカメラを回していた。

真澄はしゃがんで雅彦の目の高さに合わせる。

「男だったら欲しいものは奪い取れ。こんな風になつ」
言うなり彼女は雅彦の唇に自分のそれを押し付ける。

逆に雅彦は「奪われた」のだ。

たつぷり一分は唇を重ねていた真澄がやっと開放する。

「どうだ。こない女がキスしてやったんだ。少しは元気が出ただろ」

いい笑顔だが完全に「ヤンキー」そのものの真澄。

対して一日に二度も見知らぬ少女達に唇を奪われた少年は青ざめる。

「わあああああつ」

彼のしたことは「脱兎のごとく」逃げることだけだった。

「ちつ。なんで。根性なしが…見世物じゃねーぞつ」

野次馬を威嚇する真澄。見るなど言うのも無理な相談だが。

「あつ？ てんめー」

真澄がビデオカメラに気がついた。怒りの形相で大きなストライドで歩み寄ってくる…が、足元から煙。

それが晴れるとブレザー姿の女子高生がいた。

「やだあ。桜子さんったら。録ってたんですかあ。もう。恥ずかしい」

さらに一段階戻り女子高生になった。

この姿の時は17歳らしい。箸が転げてもおかしい年頃。

ビデオカメラでとられていたことも「恥ずかしい」で流してしま
った。

「可愛くたってね」

桜子の構えるビデオカメラにピースサインまでするほどだ。

（よかったあ。おとなしい娘になって）

確かに攻撃的なところはない。だが本性は『淫乱娘』である。

たまたま女だけだからでないがひとたび男が現れたら。

そう。まだ『男』と呼ぶのにためらいを覚えるような「少年」で
さえ彼女のターゲット。

「とりあえず帰りましょうか」

ベンチで寝ていればあちこち痛い。桜子の提案に賛同する二人。

「ジュースもらっていいですかあ？」

「あ、それは」

ジュースでなく缶チューハイだ。返答を待たずにベンチにおいて
ある袋から取り出して飲みだした。

「いいの？」

「うーん……だいぶ戻ってきているし多少ならあの姿を維持するの
にいいんちゃう？」

気分よく飲んでいるところを取りあげられるのは堪らない……これ
は酒飲みの気持ち。

それがわかったのでほつといた。

おかげで真澄は女子高生姿を維持していた。

集合住宅。

「あらいけない。雅彦。お使いいつてきてー」

雅彦の母が駅前の店へお使いを頼んできた。

（駅前か。公園は通らないからあの怖いお姉さんいないよね）

二度もキスされて恐れていたが方角が違うので雅彦は了承した。

まさかのエンカウト。雅彦は真澄と三度あった。ただし今度は女子高生姿。だから別人と認識した。

「あらあら。まあまあ。偶然ねえ。雅彦君」

「え？ どうして僕の名前を」

雅彦は猛烈に嫌な予感：それを言うなら「悪寒」がした。

お構い無しに女子高生の真澄は近寄る。

「元気出たみたいね。お姉さん。心配していたのよ」

まるで流れるように少年をその豊満な胸元に抱き寄せる。

その感触に眠っていた「男」が目覚めたか。頬を染める雅彦。

「がんばる男の子好きよ。これはお姉さんから御褒美」

ニコニコとしながら顔を近寄せる。

少年はもうなにをされるか悟っている。

そして桜子はビデオカメラを回している。

またもや唇を奪われる雅彦。

「あ、あ、あ…」

彼の生涯において一日に三度。それも全て別の女に唇を奪われるなどこの日以外にはない。

もしそれが全て同一人物なのはまだしも「正体は男」と知ったら彼の何かが崩壊するのは想像に難くない。

赤くなったり青くなったり。

「うわああああんっ」

そしてリアクションも同じだった。雅彦は『痴女』から逃げ出した。

「まあ？ どうしたのでしょうか」

「そりゃあ…いくら小さくてもこうも立て続けになすがままだにされたんじゃ男のプライドはずたずたやね」

「そうなの。男の子って？」

「あんた達もほんとに男でしょうが。はいはい。帰って寝なおすわよ。月曜は仕事なんだから」

「そうやね」

「はい」

再び駅へと向かう。

「あ。その前にちょっと待っていてくれる？ 本屋さんで買い物」
桜子は離れた。その際に邪悪な笑みを浮かべて。

月曜日。

雅彦は元気に家を飛び出した。

野球の試合でのレギュラー落ちのショック。

それは日曜にであつた痴女達の痴態で吹っ飛んだ。
結果としてリセットには成功した。

そして…そのリセットした当人は。

「見てご覧。酒井君。とてもいい表情しているよ。君、こんな可愛い表情も出来るんだね」

「……………勘弁してください」

休憩中にポータブルのビデオ再生機器で日曜のことを見せる山崎酒井は「己が痴態」を見ないように目を逸らしているが既に当日の痴態を思い出して赤面している。

（どうしてオレは酔っ払うと…）

「はいはい。酒井君のためにいい物を持ってきたわよ」

それは年齢一ケタ台の男子子役の写真集だった。

「いやあ。それにしても酒井君がシヨタとは思わなかったわ。今度はどこかの小学校にでも行く？」

からかっているが効果は覲面。酒井は耳たぶまで赤くしている。

「だあああああつ。もう二度と酒なんて飲むものかあああああつ」
決意表明するものの

（それって…二日酔いした奴が一度は言うセリフなんだよなあ）

「二日よい」が身に覚えの同僚達はその宣言が空手形と言うのはよくわかっていた。

四杯目 呑まれたら小さな恋？（後書き）

あとがき

間が空きましたが4話目をお送りします。

三話目でてきた年齢退行の設定を生かした話と思い、当初は英国の取引先が日本滞在中のメイドを探しているとなり、そこでスコッチウイスキーをたづねり飲まされイギリス風メイドになり切った真澄が、翌日幼女になって…と言う展開でした。

しかしどうもまとまらず。メイドは諦めて年齢退行だけに絞り今回のようになりました。

「富乃宝山」のくだりは2011年9月25日に行われた「@m a n b o w」のイベント。

『Happy Smile 17』内で披露されたVTRで実際に声優の井上喜久子さんがやってしまったことから。

見ていて本当に「うわぁ……」と思いました（笑）

ゲストキャラクターの雅彦君。

まだ性に目覚めてない少年では「うはうは」とは行かなかったよ
うで（笑）

まして相手が「実は男」と知ったら愕然とするか、別なものが目
覚めそうです（笑）

三話目では出来はなかったウルトラパロ。

今回は隊長さんから。

やはり名セリフは「なにっ!？」と思い（笑）

それから元・パン屋の運転手さん。

次は…合間を空けずお送りしたいと思いますが（前回もそんなことを）

お読みいただきましてありがとうございます。

城弾

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6418n/>

とらぶる すぴりっつ

2011年11月29日16時50分発行